

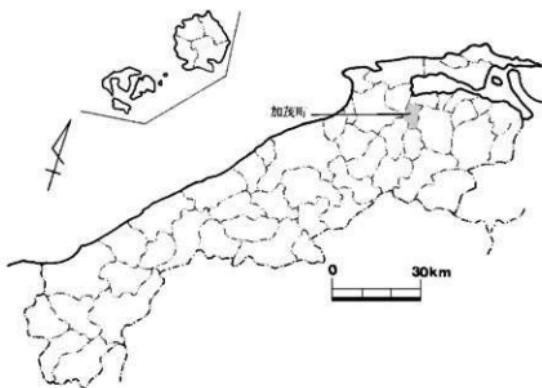
大崎元宮遺跡発掘調査報告書



2004年3月

加茂町教育委員会

大崎元宮遺跡発掘調査報告書



2004年3月

加茂町教育委員会

序

赤川の流れに沿うわが加茂町には加茂岩倉遺跡や神原神社古墳等の国指定史跡を初めとして大変著名な遺跡が数多くあります。このことは、本町域が出雲地方はいうまでもなく全国的にも原始・古代の昔から政治的・経済的に重要な土地であったことの表れであり、そのような優れた文化遺産と豊かな歴史をもつことは町民の大きい誇りとすることです。

さて、地方の歴史的遺産の多くは土地に根付き、大地に埋もれて存在するのが常です。これらが陽の日を見るのは不幸にして開発工事等による場合が多く、工事終了後にはその姿が永遠に失われて行きます。加茂町教育委員会は消滅する文化財につきましてはできるだけ正確な記録を作成(「記録保存」)して後世の人々が町の歴史を辿る際の縁となるよう大いに努力してまいりました。今後も鋭意この方針と活動は継続して参る所存ですが、ここに冊子として纏め上げたのもこのような活動の一環をなすものであります。

本町大字大崎の丘陵上にある人崎元宮遺跡は、その名の如く、役場南に鉛座します加茂神社が建立された故地であります。明治時代の初めごろに遷宮されて現在に至っているわけでありますが、遺跡が立地する丘陵を採土のため取り崩すこととなりました。災害対策のために不可避の工事であることから万やむを得ず「記録保存」で対処することになりました。現地調査は平成10年12月から翌年の5月にかけて実施し、遺漏なく終了致しました。その後出土品等の調査研究を行い、ここにその経緯と研究成果を公表いたします次第です。

今次調査の最大の成果は、加茂神社が中世初期に当地に勧請・建立されたことを考古学的に裏付けたことであります。当神社の建立は町名の由来をなす出来事であってその点で確たる証拠を得たことは大変貴重なことというべきであります。そして爾後の神社の変遷に関しても重要な事実が判明し、町域の歴史を紐解く上で大いに参考になるものと思われます。

調査の実施に当たりましては地権者の方々、高橋産業有限公司、地元町民各位には様々御尽力と御協力をいただきましたことを旨頭厚くお礼申し上げます。また、県教育委員会の適切な御指導と資料整理や研究に御助言・御協力を賜った方々にも衷心より感謝を申し上げます。

以上、本冊子が広く活用されることへの期待を込めて一筆認めた次第であります。

平成16年2月吉日

加茂町教育委員会

教育長 土江博昭

例　　言

1. 本書は、高橋産業株式会社の委託を受け、加茂町教育委員会が実施した人崎元宮遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成10年（1998）12月21日～平成11年（1999）5月31日

3. 調査を行った地番は、次のとおりである。

島根県大原郡加茂町大字大崎274、285、395-1、396、397、399

4. 調査組織は、次のとおりである。

[調査主体]	加茂町教育委員会
	教育長　土江　博昭
[事務局]	岸本　邦夫　（教育次長）
[調査担当]	平成10年度 吾郷　和宏　（文化財係係長）、山崎　修　（同主任主事） 落部　未知架　（同臨時教員） 平成11年度 吾郷　和宏　（文化財係係長）、山崎　修　（同主任主事） 上原　香里　（同嘱託職員）

5. 発掘調査、遺物整理及び報告書作成にあたり、次の方々に従事していただいた。

青木佐知子、青木直人、安部三代子、岩田孝幸、岡田洋介、小川和行

景山博光、勝部誠、加藤祥、駒原和了、曾川史明、高木繁富、高木宣雄

高橋辰徳、高橋好美、高橋萬吉、梅秀美、永瀬輝明、中林明正、錦織敏夫

舟木耕太、古川直人、松浦トシ子、三島勲、三島昌子、毛利武夫、渡部幸市

6. 報告書作成にあたり、次の方々に教示と協力を賜った。

今岡利江、会下和弘、勝部宏、加本芳枝、菊池美枝子、田中義昭、新出和子
　　柚原恒平（西ノ島教育委員会）

7. 文中の北は測量法による第Ⅲ座標系のY軸方向を指す。

8. 本書の編集・執筆は吾郷・山崎の指示に基づき、上原が行った。

9. 地形測量図作成は、株式会社ワールドに委託した。

10. 遺物の実測及び写真撮影は上原が中心になって行い下記の方々に協力をいただいた。

今岡利江、会下和弘、勝部宏、加本芳枝、菊池美枝子、田中義昭、新出和子
　　日野豊子

11. 本遺跡の山上遺物、実測図及び写真は加茂町教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第2章 遺跡の位置と地域の概要.....	3
1. 遺跡の位置と周辺.....	3
2. 地域の小史（その1）.....	3
3. 地域の小史（その2）.....	9
第3章 発掘調査の経過.....	11
1. 調査の概要.....	11
2. 古墳群の調査.....	11
3. 元宮伝承地=平坦部の調査.....	12
第4章 遺構と遺物.....	25
1. 古墳の構造と遺物.....	25
2. 元宮伝承地・平坦部の遺構と遺物.....	26
第5章 出土土師器について.....	30
1. 山上状態とその意義.....	30
2. 分類の方法.....	32
3. 群とゾーン分け.....	32
4. 群分けと調整の意義.....	34
5. その他の土師器.....	35
6. 時期について.....	35
第6章 総括.....	50

挿図目次

第1図 大崎元宮遺跡位置図.....	2
第2図 加茂町遺跡分布図.....	5・6
第3図 古墳調査前測量及び調査トレンチ.....	13
第4図 第1～第4平坦部地形及び発掘トレンチ図.....	14
第5図 第1～第3平坦部トレンチセクション断面図（その1）.....	15
第6図 第4、第5平坦部トレンチセクション断面図（その2）.....	16
第7図 第1号検出状況及び土層断面図.....	19
第8図 第2、第3号検出状況及び土層断面図.....	20
第9図 第2平坦地、平面図、礎石配置図.....	21

第10図	ピットの深さ分類図（その1）配置図	22
第11図	ピットの深さ分類図（その2）配置図	23
第12図	出土遺物実測図（須恵器、陶磁器）	25
第13図	出土遺物実測図（鉄器、鐵滓等）	30
第14図	出土遺物実測図（古銭）	31
第15図	土器の大きさ分布図（その1）	36
第16図	土器の大きさ分布図（その2）	36
第17図	土器の大きさ分布図（その3）	37
第18図	土器の大きさ分布図（その4）	37
第19図	土器の大きさ分布図（その5）	38
第20図	土器の大きさ分布図（その6）	38
第21図	出土遺物実測図（土師器）	39
第22図	出土遺物実測図（土師器）	40
第23図	出土遺物実測図（土師器）	41
第24図	出土遺物実測図（土師器）	42
第25図	出土遺物実測図（土師器）	43
第26図	出土遺物実測図（土師器）	44

表 目 次

第1表	加茂町遺跡一覧表	8
第2表	ピットの深さ	24
第3表	出土遺物観察表1（須恵器、陶磁器）	45
第4表	出土遺物観察表2（鉄器、鐵滓等）	45
第5表	出土遺物観察表3（古銭）	46
第6表	出土遺物観察表4（土師器）	46
第7表	文献等からみた上賀茂神社の変遷表	51

写 真 図 版 日 次

- 図版 1-1 遺跡遠景（南より）
 1-2 古墳群（1号・奥側、2号・手前）東西南北トレンチ（南より）
 図版 2-1 1号墳発掘調査前状況（南より）
 2-2 2号墳発掘調査前状況（南より）

- 2-3 3号墳発掘調査状況（南西より）
- 図版 3-1 古墳群（1号・手前、2号・奥側）東西南北トレンチ（北より）
- 3-2 1号墳東側周溝（南より）
- 図版 4-1 3号墳発掘状況（西より）
- 4-2 2号墳北側溝内上層断面（東より）
- 4-3 3号墳北側溝内土層断面（西より）
- 図版 5-1 1号墳全体完掘状況（東より）
- 5-2 1号墳南側墳裾 須恵器出土状況
- 図版 6-1 1号、2号墳北側周溝（西より）
- 6-2 2号、3号墳完掘状況（北より）
- 図版 7-1 2号墳 須恵器出土状況（北東より）
- 7-2 2号墳 須恵器出土状況
- 図版 8-1 2号、3号墳完掘状況（北東より）
- 8-2 2号、3号墳完掘状況（北より）
- 図版 9-1 第1、第2平坦地調査前状況（南より）
- 9-2 第1平坦地完掘状況（南東より）
- 図版 10-1 第2平坦地発掘調査前状況（南より）
- 10-2 第1平坦地、第2平坦地発掘調査後状況（南より）
- 10-3 第1平坦地南北トレンチ・グリット掘り下げ前状況（北より）
- 図版 11-1 第2平坦地礎石検出状況（北西より）
- 11-2 第2平坦地 N15・W0~5トレンチ 硙石・上層断面（南より）
- 図版 12-1 第2平坦地 主軸トレンチ土層断面・柱穴検出状況（東より）
- 12-2 第2平坦地 N5・W0~5トレンチ 土層断面（南より）
- 図版 13-1 第2平坦地礎石及び柱穴検出状況（北より）
- 13-2 第2平坦地礎石及び柱穴検出状況（北西より）
- 13-3 第2平坦地礎石及び柱穴検出状況（南より）
- 図版 14-1 第2平坦地主軸トレンチ1G 上師器出土状況（南より）
- 14-2 第2平坦地掘立柱建物跡 完掘状況（北より）
- 図版 15-1 第2平坦地掘立柱建物跡完掘状況（北東より）
- 15-2 第1、第2平坦地完掘状況（南西より）
- 図版 16-1 第2平坦地西側上塁 N15・W5~10トレンチ土層断面図
- 16-2 発掘風景
- 図版 17-1 須恵器（坏蓋）
- 17-2 須恵器（坏身）

- 17-3 須恵器（环身）
- 図版 18-1 須恵器（高台付环）
- 18-2 白磁（碗）
- 18-3 陶器（碗）
- 18-4 土師器（柱状高台付环）
- 図版 19-1～4 鉄器
- 19-5・7・8 鉄滓 6鉄塊
- 図版 20-1～7 錢
- 図版 21-1～3 第1T r、1G出土遺物
- 図版 22-1～3 第1T r、1G出土遺物
- 図版 23-1～3 第5T r-1G出土遺物
- 図版 24-1～3 第5T r=1G出土遺物
- 図版 25-1～3 第5T r-1G出土遺物
- 図版 26-1～3 第5T r=1G出土遺物
- 図版 27-1～3 第5T r=1G出土遺物
- 図版 28-1～3 第5T r=1G出土遺物
- 図版 29-81. 1～5 第5T r-1G、直交T r-3G出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

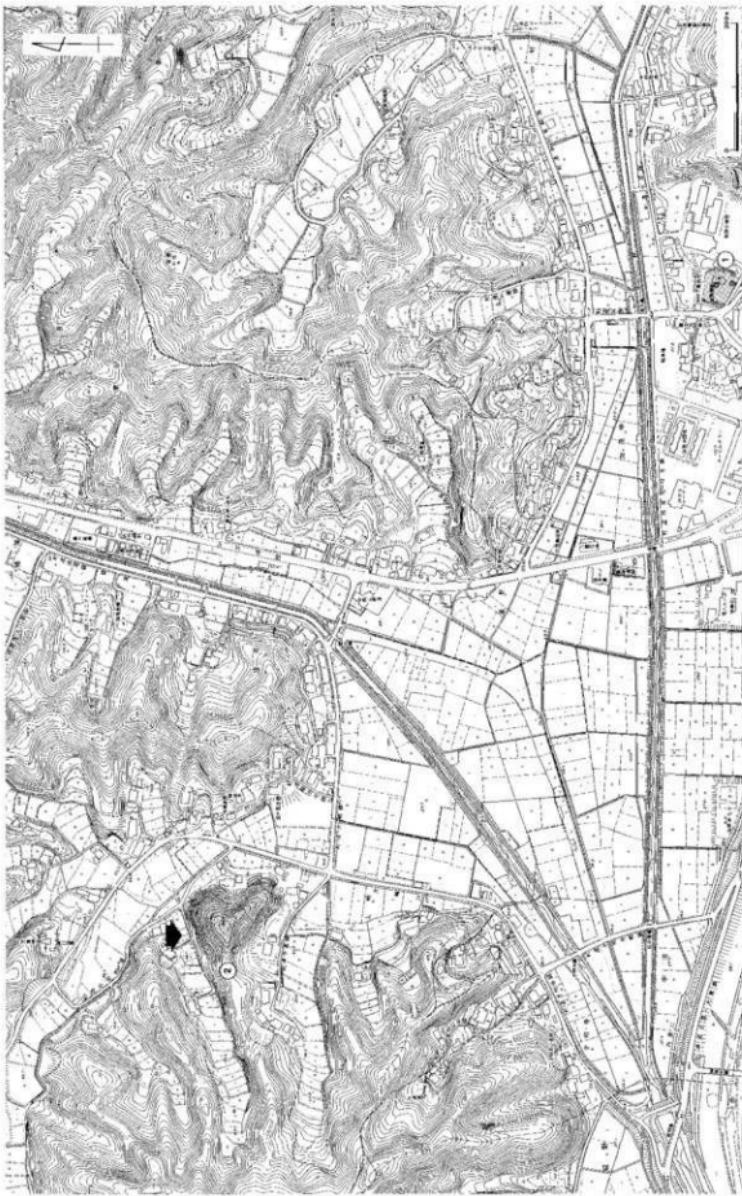
〔遺跡の所在〕 大崎元宮遺跡は島根県大原郡加茂町大字大崎274、285、395-1、396、397、399に属している。現況は山林で、所在地内には、1987年刊行の『島根県遺跡地図I（出雲・隠岐編）』によると「寺廻寺院跡」、「寺廻横穴墓」として登録された遺跡があり、1990年に実施された加茂町域の遺跡分布調査でも同じ名称の遺跡の存在が確認されている。この丘陵と谷一つ隔てた東側の丘陵上には「猪尾城跡」があり、古くから付近一帯は中世期に地頭宍道氏の支配領域であったと伝えられている。

〔調査への経緯〕 かねてより、当該遺跡付近は土砂崩れによる災害が懸念された地域で、土地所有者諸氏他、地域町民より土砂採取による危険回避の要望が出されていた。これを受けて町による「真砂土採取事業」が計画され、1997（平成9）年11月に、施工業者高橋産業株式会社より事業予定地内の埋蔵文化財の有無についての問い合わせが町教育委員会に寄せられた。

町教育委員会では、加茂岩倉遺跡発見の余韻冷めやらない時であり、周囲の遺跡の存在状況から推しても看過できない地域として、文化財担当の呑郷等が直ちに現地に赴き、あらためて事業予定地内の文化財の分布調査を実施した。その結果、丘陵頂面に3個所の隆起部があり、古墳の可能性の高いことが想定された。また、南東に延びる尾根上には2段の平坦部が認められた。当地は古文獻や地元伝承によると近世まで上賀茂神社（後に遷宮し、現在、加茂中の加茂神社境内にある）があり、「元宮」の字名もそれに由来するとされている。この平坦地こそ上賀茂神社のかつての建立場所であることが確認されるに至ったのである。

〔調査の経過〕 以上のような、遺跡踏査からえられた認識に基づいて、町教育委員会は事業者及び土地所有者、町民と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、これの現状保存を追及したが、事業の性質上困難であるとの結論に達し、1998年9月16日付けで文化財保護法第57条2第1項による埋蔵文化財発掘届出が提出された。これにより事業着手前に発掘調査を実施することとなり、加茂町と工事担当の高橋産業有限会社との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約が交わされ、町教育委員会は、1998（平成10）年12月14日付けで島根県教育委員会経由、文化庁へ発掘調査着手届を提出した。調査主体は町教育委員会である。

平成10年度は、遺跡の全体像を把握するために、山林伐採、測量基準点の設定、地形測量を行い、それに基づいて調査区とトレンチ設定、一部を掘り下げて遺構の保存状態等を観察した。平成11年4月初めからは古墳の発掘調査を開始し、平坦部の調査も継続して実施した。最終的には丘陵上に古墳3基、平坦部では大型の掘立柱建物跡や礎石建物跡とこれに関連する遺構・遺物群を検出し、5月末に全調査を終了した。なお、遺跡の測量関係業務は株式会社ワールドに委託した。



- ①加茂神社
②大崎元宮遺跡

第1図 大崎元宮遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と地域の概要

1. 遺跡の位置と周辺 (第1図、図版1-1)

大崎元宮遺跡の所在地は先述の通りである。立地地形をやや詳細に観察すると、当該地は東に向かって小さく張り出した半島状の丘陵頂部で、標高66~50m、最高位と水田面との比高は約30mである。遺跡が広がる頂上部は北西・南東方向の狭い緩傾斜面をなしている。北・南・東側は小河川の浸食による急斜面となっている。西侧は細い鞍部状の尾根を介して西方の山塊に繋がる。基盤層は第三紀の花崗岩系の地層である。

遺跡の前方には赤川とその支流の猪尾川・中村川の合流地を控え、比較的広汎な水田地帯を眺望することができる。松江・尾道間の中中国横断自動車道建設にともなう橋脚設置の際に行われた地質調査によると、ここ一帯は砂層が厚く堆積し、その下部に粘土層があり、さらにその下部が硬い岩盤になっているという。これを解すると赤川・中村川・猪尾川の流れによって岩盤が削り取られ、長く深い谷地形が形成されたものと思われる。その時期としては顯著な海退期とされる第四氷期を考えられる。上部の粘土層は完新世初期に起こった海進一繩文海進によるものであろう。そして、最上部の厚い砂層は主として近世のかんな流しによるものと推定される。これに従えば、おそらく中世以前に当地は深い渦状の湖沼地であったことが推定され、斐伊川に繋がる水運の交通路として利用されたことが考えられる。弥生時代にあっても事情は同じであり、湖沼の縁辺に水川が開かれ、集落が存在したのである。例えば、猪尾川の上流部、本遺跡から北西北1.2キロには加茂岩倉遺跡があり、小谷を隔てた東側の丘陵上には中世・猪尾城跡が残っていて付近には地頭穴道氏の居館の存在も予測されるようである。ちなみに景初3年銘鏡が出土して有名になった神原神社古墳は本遺跡からは赤川を越えた直南約0.8kmの位置にある。けだし、加茂町域において歴代の遺跡が集中する中核的な地域となった自然史的背景ができる。

2. 地域の小史 (その1) (第2図、第1表)

大崎元宮遺跡成立の背景をいま少し探る意味で当地域の歴史的変遷を概観しておこう。中海・宍道湖沿岸地域では、近世旧石器時代後期の遺跡と遺物が相次いで発見されている。加茂町域では未発見であるけれども南北交易路をなした斐伊川流域と日本海沿岸の東西交易路がクロスする地域に含まれられるこの地も旧石器時代が地域史の起点となる可能性は高いとみるべきであろう。繩文時代の遺跡も未発見であるが、南加茂宮下遺跡や下笠遺跡からは繩文時代産かと見られる石器が採集され、延野の湯の奥遺跡では安山岩製と黒曜石製の石器が出土している。したがって、この時代についても旧石器時代の遺跡と同様に今後存在の確認される日が到来することは十分予測してよい。

弥生時代については加茂岩倉遺跡(中期)、神原正面北遺跡(中・後期)等著名な遺跡がある。遺跡の内容は周知されているが、求められることはこれらの顯著な遺跡を生み出した地域の歴史的事情である。もっとも中心的な問題として当時の集落や農業、その他の生産がどうであったのかを

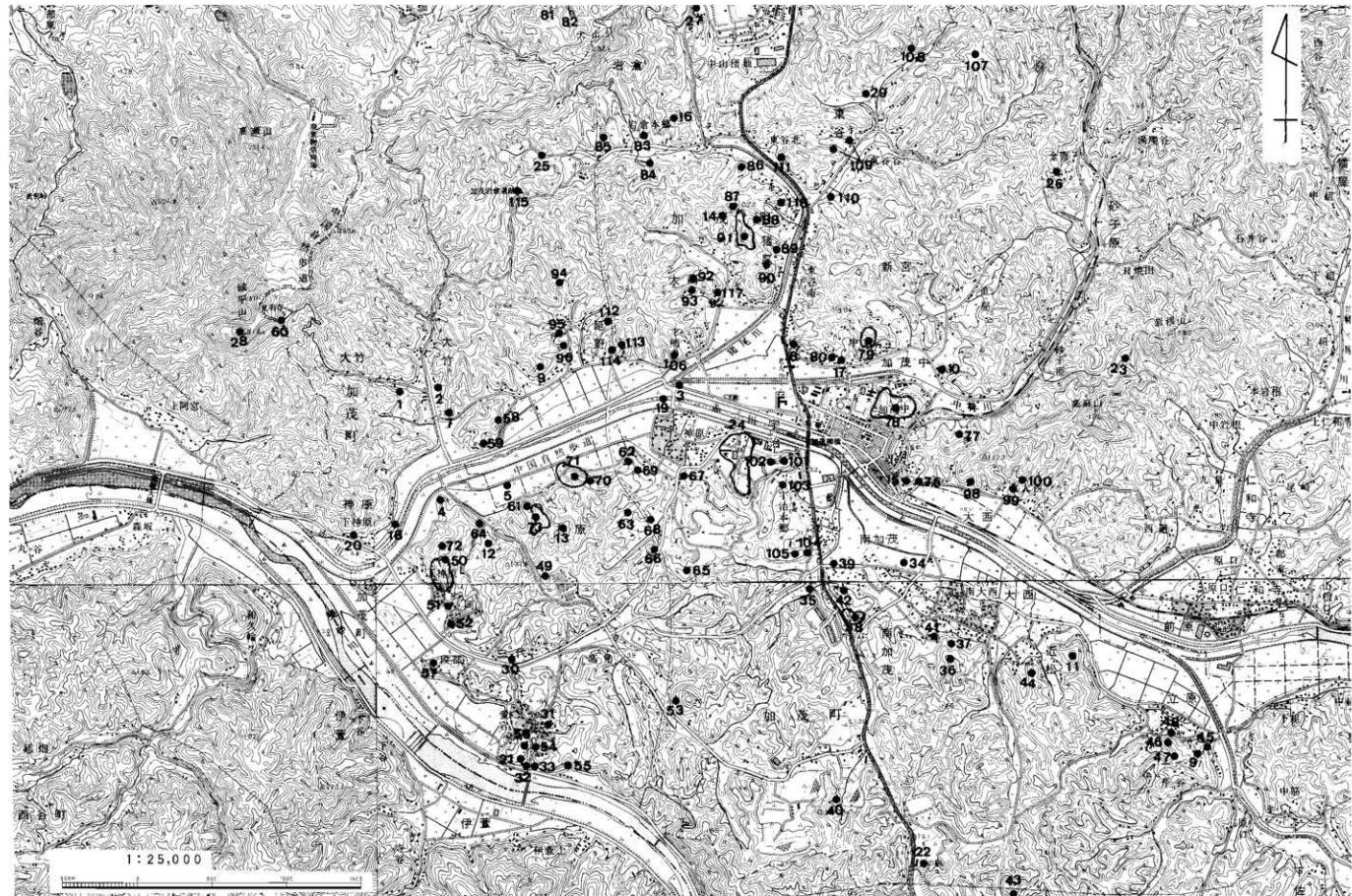
解明することができる。しかしながら目下のところでは弥生土器が出土した遺跡はきわめて少なく、現状では今後の調査研究に期待する他はない。弥生土器が出土した遺跡としては神原正面北遺跡以外では土井・砂遺跡（中期）、下笠遺跡（後期）等が知られているに過ぎない。ただ、下笠遺跡等は赤川の沖積地に面した広い低位段丘上にあり、相当広範囲に遺物の散布が認められる。ここに雄勢な集落が営まれたことを推定する余地は十分あるとしてよいし、神原神社古墳が立地する低位段丘面についても同様なことがいえるであろう。

加茂岩倉遺跡から39個の銅鐸が出上したことは加茂町の歴史上でも特筆すべきできごとであった。この遺跡と出土した銅鐸群が何を呼びかけているのかについての研究や見解は百家争鳴状態といってよいほど提出されているが、なお、不明なことが多々ある。弥生時代の地域事情といった立場から考えると、赤川・猪尾川・中村川が合流する加茂中・神原一帯が、当時、人と物が行き交う要衝の地であり、銅鐸等の貴重な文物がこの地の有力集団に保有されていたのではないかと思われる。神原正面北遺跡群中の弥生墳墓群はそうした場所に有力な地域統括・管理者集団が誕生したことを見示すといえるのではないだろうか。

古墳時代の遺跡は各所で発見されている。神原神社古墳が投げ掛けた地域史学的研究課題は、加茂岩倉遺跡についてもいえることだが、加茂町域はもとより古代出雲史全体に関わることで、その成果の一端はすでに多くの論者によって提出されているところである。このことを念頭において、町域における前半期の古墳や関連遺跡について瞥見しておこう。弥生中期後半以降継続的に墳墓が営まれてきた神原正面北遺跡では古墳時代に入ってからも営墓活動が継続している。前期と考えられる古墳はA～E区の中、C・E区で発見されている。E区の場合、東西に延びる尾根上に大小9基の方墳（一辺6～10m、箱形木棺等を収める）が列をなして築造されている。隣接の神原正面南遺跡でも前期の方墳が発掘されている。南隣の宇治寺ノ上方墳群も相前後する時期に営まれた古墳群ではないだろうか。

神原神社古墳の南西0.5キロにある土井・砂古墳群は前期前半に築造された6基の小規模な方墳群で、主体部は墓坑に木棺を収めた簡素なものであった。副葬品には少量の鉄器と破鏡がある。猪尾川に面した丘陵上にある小西方墳群等にも同じような様相が看取されるところだが、こうした丘陵上の前半期古墳群は、おそらく丘陵下に關係の深い集落群があり、その集落群を統率する小首長層を埋葬したものと考えられる。弥生時代後半期以降には赤川の本・支流域の各所にこうした集落群が形成され、その長が累代的に丘上に墳墓を営んだことが考えられよう。神原神社古墳の被葬者はこれら小首長が挙って推載する大首長であったと推測される。先の下笠遺跡では古墳時代前期の土器が採集されていて、この期の集落存在を具体的に示している。

古墳時代も後期になると町域の各所に横穴墓が出現している。山腹に掘り込まれた横穴墓は大半が数基から数10基とまとまり、群集するのが一般的である。現在20個所で横穴墓群の所在が記録されているが、その分布状態を見ると、猪尾川・中村川合流地の沖積平野周囲の丘陵斜面に6群がまとまって存在し、下手の大竹地区の谷筋に4群が集結している。神原神社古墳の西方丘陵斜面にも



第2図 加茂町遺跡分布図

数群が点々と見られる。これら分布密度の高い個所には共通する地形状の特徴が認められる。すなわち、赤川の本流に向かって半島状に突出した丘陵群があり、丘陵群の間を小河川が細長い谷を形成しつつ流れ出て赤川に注いでいる。ほとんどの横穴墓群はこれら小河川の谷口付近の丘陵斜面に営まれているのである。当該の個所は、猪尾川・中村川合流地に典型的に示されるように、赤川の自然堤防と小河川の水流の合成作用による後背湿地が形成され、比較的安定した可耕地となっていたことが考えられる。古墳時代後期には鉄製農具の広汎な普及を背景にして古代的家族集団の水田経営が活発になり、こうした可耕地に対する造田・営農活動が積極化したことが想定されるところである。多くの横穴墓群は農民集団中の有力家族的集団の奥津城であり、その出現は彼等の経済的な優位性と自立化獲得の証と捉えることができよう。

横穴墓の分布でいま一つ指摘して置くべきこととして猪尾川上流部の平川横穴群、岡川支流の谷頭にある東谷横穴群の存在である。これらの被葬者もまた古代的家族集団であろうが、彼等は耕作条件に相対的に恵まれない谷奥に水田を拓き、いわゆる谷戸経営に踏み出した集団として記憶されるべきであろう。加茂町域では、古墳時代後期を境にして水田経営可能な土地に対する開拓の歴が全般的に開始されたと見られる。

周知のように、古墳時代後期における小規模古墳や横穴墓の普及は全国的な動向であって、町域の横穴墓の出現と広がりもそうした動静の一環として捉える必要がある。このことに関わって赤川流域の横穴墓が「断面三角形のテント形」といわれる穴構造を採用していることに注目しなければならない。その意味するところは必ずしも明確ではないが、たんなる文化現象とのみ解するには問題がある。少なくともそこには律令制の専制支配の前提となる在地の政治的・社会的構造を看取する視点が求められよう。町域の後期古墳を一見すると、例えば二代古墳のような有力古墳の存在は注視する必要がある。この古墳は斐伊川と赤川が合流する狭い冲積地に面して築かれ、横穴式石室を内蔵している。石室内からは金銅装の環頭大刀をはじめとして多数の須恵器、鐵斧等が出土した。これに類する古墳は町域に例がなく、中央政権からの下賜品とされる優品の大刀を所持したこの古墳の被葬者が6～7世紀の頃に町域全体の有力首長の一人であったことは疑いない。ただ、古墳の所在地が斐伊川本流沿岸で、町域の中心部から外れていることが問われてくるが、赤川と斐伊川の合流点を控えていることから、河川交通の要衝を抑えることの重要性を説けば理解の道が開けるかも知れない。

二代古墳に次ぐ規模の墳丘と石室をもつ古墳は未発見であるが、湯後遺跡2号横穴墓のように家形石棺を内蔵した例があり、さらに組合石棺を収めた横穴墓も數例が知られている。湯後遺跡は赤川に面した丘陵先端部にあり、2群8基の横穴墓が確認されている。遺跡は延野地区の赤川の沖積地に向かって開いた小谷口に面した丘陵斜面に位置し、付近にはさらにいくつかの横穴墓群の存在が予測されるところである。2号墓の被葬者が延野一帯の開発によって台頭した古代的家族集団の指導的地位を有していたことが推定される。西に隣接する大竹地区の谷も奥行きが深く、谷口付近には長尾谷尻・穴の前・墳ノ内等の横穴墓群が集中している。穴ノ前横穴墓群は13基以上で構成さ

第1表 加茂町遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	玉尾谷山横穴群	横穴	41	下馆遺跡	散布地	81	蛭塚遺跡	蛭塚
2	猫里古墳	古墳	42	南加茂宮下遺跡	散布地	82	結木寺の塔遺跡	古墓
3	神原神社古墳	古墳	43	八ツ畦占戦場跡	占戦場	83	淨久寺跡	寺院跡
4	菅代横穴群	横穴	44	宮山城跡	城跡	84	家守神社	神社跡
5	土器削横穴群	横穴	45	荒神延古墓群	古墓	85	坊ノ奥跡塚	塚塚
6	川子谷古墳群	古墳	46	寺ノ上城跡	城跡	86	猪尾社跡	神社跡
7	穴の前横穴群	横穴	47	伝立原館跡	館跡	87	奥町内城跡	城跡
8	星野横穴群	横穴	48	寺ノ上古墓	古墓	88	二室館古跡	製鉄遺跡
9	牛山横穴群	横穴	49	夕日谷古墳	古墳	89	三室横穴	横穴
10	小丸子山城跡	城跡	50	岡ノ上城跡	城跡	90	森本古墓群	古墓
11	近松城跡	城跡	51	大上横古墓	古墓	91	猪尾城跡	城跡
12	大茶臼山城跡	城跡	52	高鞋古墳	古墳	92	寺割寺院跡	寺院跡
13	後ノ酒庭塚	経塚	53	高麻神社跡	神社跡	93	寺割横穴	横穴
14	板屋横穴群	横穴	54	長谷寺古墓	古墓	94	鉄クソ跡	製鉄遺跡
15	立石横穴群	横穴	55	長谷川寺上へ城跡	城跡	95	布須社和鏡出土地	祭祀遺跡
16	平田横穴群	横穴	56	矢ノ尻古墓	古墓	96	奥ノ上の五輪塔	古墓
17	叶廻横穴群	横穴	57	本岡田墓地の石塔	古墓	97	神宮寺上の五輪塔	古墓
18	神原五輪塔遺跡	古墓	58	大田山崎寺院跡	寺院跡	98	伝栗光寺跡	寺院跡
19	消米塚古墳	古墳	59	垣ノ内横穴群	横穴	99	小門谷の五輪塔	古墓
20	草枕古墳	古墳	60	光明寺の古墓	古墓	100	小門谷城跡	城跡
21	三代古墳	古墳	61	土器廻古墳	古墳	101	龜山石横塚	蛭塚
22	清水ヶ谷遺跡	古遺跡	62	深田と鏡川土地	古墓	102	神原正面城跡	城跡
23	高麻城跡	城跡	63	相保福鏡出土地	古墓	103	宇治寺ノ上古墳群	古墳
24	神原正面遺跡	古墳他	64	沢平横穴	横穴	104	焼荒神の五輪塔	古墓
25	岩倉大谷山城跡	城跡	65	高城跡	城跡	105	焼荒神古墳群	古墳
26	大蛇子遺跡	祭祀遺跡	66	乗越遺跡	散布地	106	才明寺の五輪塔	古墓
27	伊志見谷城跡	城跡	67	桜古墓	古墓	107	蛇喰谷城跡	城跡
28	城平山城跡	城跡	68	竹ノ内古墓	古墓	108	滝谷城跡	製鉄遺跡
29	東谷横穴	横穴	69	土井・砂遺跡	古墓・横穴	109	正福寺の古石塔	古墓
30	楓河窓跡	窓跡	70	出古墓	古墓	110	鍋谷の五輪塔	古墓
31	杉原窓跡	窓跡	71	上城跡	城跡	111	松賀和鏡出土地	古墓
32	御代窓跡	窓跡	72	下神原西岡古墳群	古墳	112	湯ノ奥遺跡	集落地
33	御代赤瓦組合窓跡	窓跡	73	松ノ木遺跡	散布地	113	尊安寺遺跡	古墳
34	南加茂瓦窓跡	窓跡	74	尾添の上城跡	城跡	114	湯後遺跡	横穴
35	高峰の五輪塔	古墓	75	大首城跡	城跡	115	加茂岩倉遺跡	銅鐸理納地
36	会下尼館跡	館跡	76	尾添の宝鑑印塔	古墓	116	妙栄寺遺跡	古鉄理納地
37	上渡古墓	古墓	77	中村古城の五輪塔	古墓	117	大崎元宮遺跡	神社跡・古油
38	二木松古墳群	古墳	78	宝藏寺跡	寺院跡	118	小西古墳	古墳
39	小谷城跡	城跡	79	藏福寺跡	寺院跡	119	穴道尾遺跡	街道跡
40	小宮谷製鐵遺跡	製鐵遺跡	80	金丸五輪塔	古墓			

れたと伝えられ、玉尾谷尻横穴墓群でも7基以上の存在が知られている。これらが6～7世紀の頃、大竹の谷域に根を張った雄勢な古代家族群の奥津城であることは容易に推測がつくであろう。そして、湯後2号墓の被葬者の如きは、これら家族群を束ねる村落的首長の地位にあった有力者とすることができるであろう。

いずれにしても、6～7世紀の頃には古代の集落と村落の枠組みが相対的に明確になってきたことが推測され、ここに新たな支配原理に基づく農村の政治的編成が企図されるに至ったと思われる。やがて律令制の下での農村支配が浸透してくるのである。

3. 地域の小史（その2）

奈良・平安時代については、まず『山雲国風土記』（以下、「風土記」）の記載から地域を辿ることになる。加茂町域は大原郡神原郷と犀代郷の2郷に含まれるという。前者は神原・大竹・延野・宇治地区を郷域とし、郷庁は宇治土居付近比定されている。後者は二代・南加茂・中村・大西・近松・立原・加茂中・砂子原・東谷・猪尾・大崎・岩倉地区を郷域にしたという。郷庁は中村上区に求められている。ただし、『風土記』では郷名の巾來と郡家からの距離を表示するに止まって、郷内の様子にはなんら触れていない。先の郷域地名比定はいずれも後世の集落・村落状況からの推測に過ぎない。古代村落の実態に即した郷構成を明らかにするためには精度の高い考古学的調査が必要であるが、いまはそうした課題に応えうる調査研究はきわめて乏しく、今後に期待する他はない。

鎌倉・室町時代の加茂町域には福田荘とか大西荘の荘園が置かれていたとされる。それらの荘園については必ずしも明瞭ではないが、少なくとも、前者が中村川の中・下流域を核とし、後者が赤川を挟む北大西と南大西地区を主体に展開していたことを予測しておきたい。これまでの分布調査によれば、加茂町域における中世（近世初を含む）遺跡は42個所確認されている。遺跡の種類としては城跡・館跡・古墓・寺院跡等があるが、数的には城跡が大半を占める。これら諸遺跡の分布をみると、猪尾川流域の猪尾・東谷地区、中村川流域の加茂中・北大西・砂子原地区、赤川左岸で町域南東部の南加茂・南大西・近松・立原地区、同じく赤川左岸の南西部の宇治本郷・神原地区にルーズなまとまりがあるように思われる。遺跡分布上にみられるこうしたブロックは中世期全体にわたるトータルなものであって、そこから何がしか地域史の動向を導き出すことは困難であるが、例えば城館調査の成果が示すように今後の地域史研究の手掛かりとなるような遺跡が存在することも事実である。

町の東部で木次町との境に跨る高麻城跡は雄族人西・鞍掛氏の居城と伝えられる。ここでは、山頂部を中心に多様な郭・堀切・堅堀・虎口・井戸等の遺構が発見されており、戦国期の典型的な城郭として注目されている。また、人崎元宮遺跡の東丘陵にある猪尾城跡も城郭構造の大略が明らかにされており、先述のように地頭の任にあった土豪穴道氏の居城跡との想定がある。さらに、南大西地区の近松城跡は立原氏の居城跡と推定され、縋張図が作成されている。これらの他に、南加茂の国道54号線沿いにあった小谷城跡は山内氏の城とみられ、会下居館跡遺跡は山内氏の館跡の可能

性が考えられるという。同様な遺跡の組み合わせは立原地区の寺ノ上城跡と立原居館跡遺跡でも想定され、これらが在地土豪立原氏と深い関連をもつ遺跡群として、山内氏関連遺跡共々今後の探索が求められるところであろう。

これらとは別に特記すべきこととして「神原部落蔵」とされる四耳壺と湖洲鏡の存在がある。経塚出土と伝えられるが、その現況は把握できていない。しかし、これらの遺物は中世前期に中国より輸入されたもので、地方の有力者が所蔵したものに違いなく、当時の状況を探る上で貴重な遺品というべきであろう。

以上、中世の加茂町域には上記の他にも数族の土豪の存在が知られており、彼等の盛衰と諸遺跡の消長との関連づけが解明されれば、より具体的な地域の中世像を描くことが可能となるであろう。

江戸時代以降については遺跡と遺物に関する情報は少ない。文献史料優勢の時代であることによるが、考古学的な調査が不十分なことも大いに関係している。当時の建築（旧家、寺社等）、産業遺跡・遺物（治水瀬懸遺跡・農具類・陶磁器生産関係）、水運、街道、街並み等の調査・研究は近時盛んになりつつあり、文献では知りえないこと、あるいは文献に記載された事実を補強することなど多くのことが判明してきている。このことによってわれわれの時代である近・現代に直近する歴史の様相を具体的に理解しうるようになり、郷土への关心や愛着を涵養する幅となっている。時代の要請に応じて加茂町域においても巾・近世の歴史遺産に対する調査をより促進していく必要があろう。

参考文献 内藤正巾編『日本歴史地名人系33・島根県の地名』(1995年、平凡社) 所収の「大原郡 加茂町」の項。

加茂町誌編纂会編『加茂町誌』1984年、加茂町。

中林季高『加茂町史考』1957年、加茂町史考頒布会。

吾郷和宏他『加茂岩倉遺跡発掘調査概報 I』1997年、加茂町教育委員会。

第3章 発掘調査の経過

1. 調査の概要

調査に先立って樹木の伐採を行ったところ、踏査時に確認した2個所の平坦部の下方西側斜面にも2段の細長い平坦部のあることが判明した。そこで、頂部の古墳とその南尾根上の古墳2基、さらに下方の2個所の平坦部を併せて4個所の平坦部を中心に発掘区を設定して調査を進めることになった。古墳群については高い個所から順に1号墳、2号墳、3号墳と命名し、平坦部についても上部より第1平坦部、第2平坦部、第3平坦部、第4平坦部とした。発掘調査は1998年12月21日より開始し、翌99年5月31日までに現地の調査を終了した。

調査は、丘陵北側の古墳群と南側の「元宮」伝承地の平坦部に分けて行うこととしたが、作業は2個所を同時進行で実施した。以下、古墳群の調査、元宮伝承地=平坦部の調査のそれぞれについて調査経過を述べる。

2. 古墳群の調査（第3、7、8図 図版1～8）

〔1号墳〕1号墳は遺跡の立地する丘陵の最高部に位置し、標高は約66mの地点にある。墳丘の西側は後世の削平により切り取られ、残丘は低く、形態は円墳あるいは方墳と予測された。墳丘の築造の状況及び主体部の確認のため、墳頂を中心に東西南北に走る巾50cmのトレンチを設定し土層の堆積状況を確認しながら墳丘及び埋葬主体の精査のため発掘を全面に広げて調査を行った。土層の堆積状況は表土が約40cmの厚さで墳丘全体に堆積しており、以下、黄褐色砂質土(盛土)、黒色土(旧表土)が順次堆積しており、次いで黄褐色砂質土の地山に至る。土層観察の結果、この古墳は周囲の旧表土・地山を削り込み、墳頂部には旧表土を残したまま約20cmの盛土を施して築造されたと推定できる。墳丘東側では長さ約5m、巾約1mの周溝を確認した。周溝はほぼ墳形に沿って直線的に掘られており、これを境にして東側にも低墳丘の墳墓の存在が推定された。墳形に関する遺構はこの溝以外には検出できなかたが、同心円形に巡る等高線等の状況を考慮すると、この古墳は径約10m、高さは1.7m程度の円墳とするのが適当と考えられる。

遺物については墳頂部表土直下で須恵器壺片が2点出土しており、また、墳裾の地山直上で須恵器蓋壺の身が1点出土している。墳頂表土直下で遺物が出土したことからこの下層部に埋葬主体が残存している可能性があると予測し、精密な観察により慎重に土層の剥ぎ取りを進めたが、その存在は確認できなかった。

〔2号墳〕2号墳は1号墳の南、標高約6.3mの地点にある。墳頂を中心東西南北に十字に走る幅約50cmのトレンチを設定して調査を進めた。その結果、南北両側では1号墳、3号墳の間が東西方向の溝で区分されていることが判明した。また東西方向については丘陵の崩壊のため明確な墳裾の把握は困難であった。とくに東側は崩壊が墳丘の一部にまで達しており、端部の確定はできなかった。トレンチ断面の観察によると表土以降約30cm、ところによっては約10cmで堅い暗赤色の

岩盤になる。この結果をもとに十層の堆積状況を確認しながら墳丘及び埋葬土体の精査のため発掘調査を墳丘全面に広げた。

上層の堆積状況は表土が約20~40cmの厚さで墳丘全体に堆積しており、以下、黄褐色粘質土(盛土)、黒色土(旧表土)が順次堆積して黄褐色砂質上の地山に至る。1号墳と同様にこの古墳も旧表土と地山を削り出し、墳頂部は旧表土を残したまま約20cmの盛土を施して築造されたと推定できる。墳丘の北側に長さ約6m、幅約0.4mの東西方向に走る溝を検出した。この溝は墳丘の等高線と平行して内湾する。また、2・3号墳間の溝の上場ラインも墳丘等高線と平行するので2号墳は径9.5m、高さ約1.3mを測る円墳とすることができる。なお、2・3号墳間溝の上層の観察からは2号墳が後出であることを確認した。その他の遺構として墳裾北東隅と南東部で直径約70cm、深さ約30cmの火を受けて赤色を帯びた浅いピットを検出している。

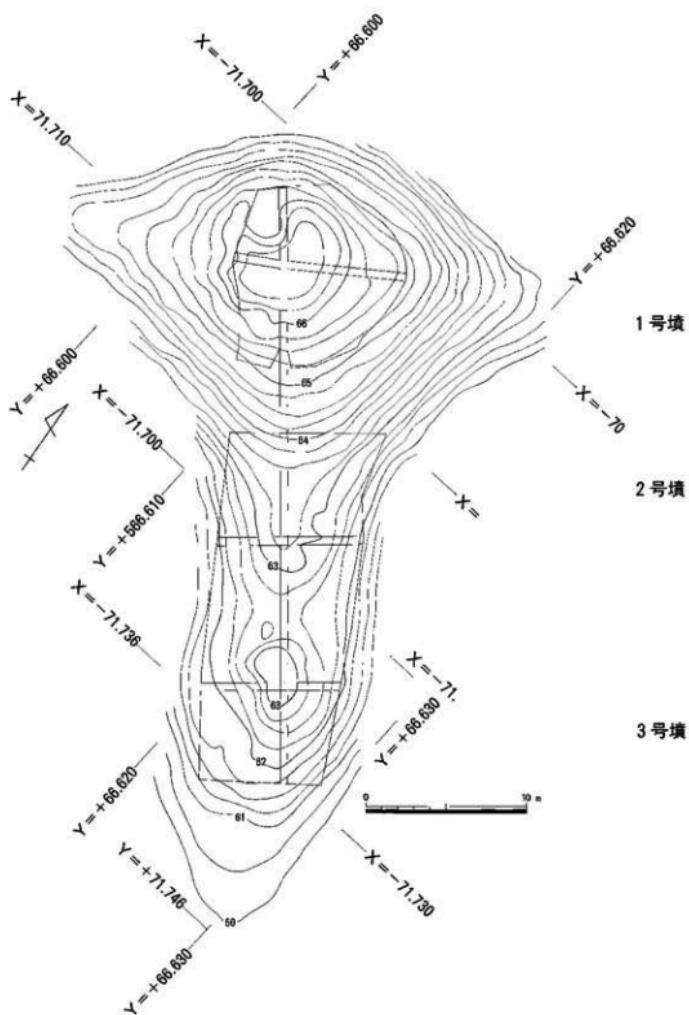
遺物は墳頂表土直下で光形品の須恵器环身1点と环蓋1点が出土した。下部に埋葬土体がいくらか残存している可能性があるものと予測されたので上層の堆積状況を観察しながら慎重に剥ぎ取りを進めたが土体部的な遺構の存在は確認できなかった。

(3号墳) 3号墳は2号墳の南、標高約63mの位置にある。自然作用による盛上の流失が激しく、墳丘東側も西側も崩壊していたためか墳丘全体が低く、墳端も定かではない。墳頂を中心東西南北十字に設定した幅約50cmのトレンチの上層観察により墳端を推定したところ、2号墳との間に湾曲する溝が検出できたので、このことを参考にして3号墳は径が約7.4m、高さ約1.2mの円墳と推定した。

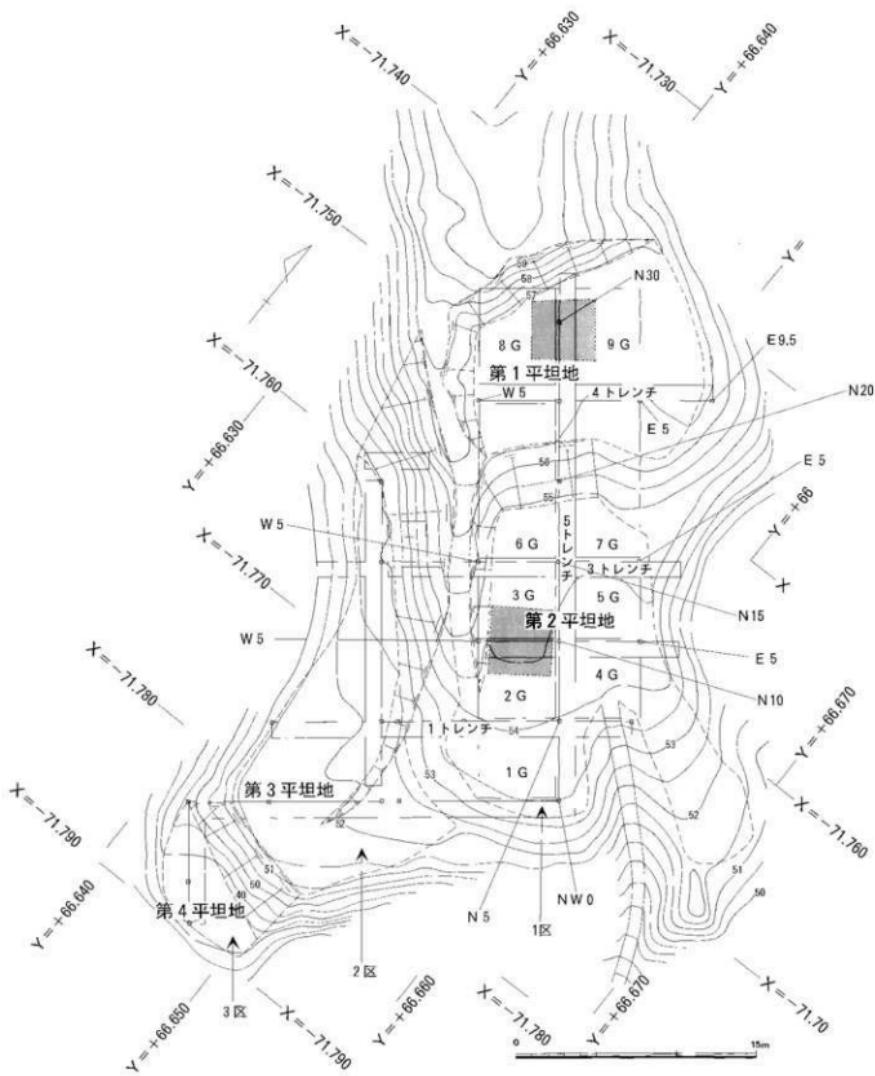
十層の堆積状況は表土が約20cmの厚さで墳丘全体に堆積しており、以下、黄褐色粘質土、黒色土、暗褐色粘質土が順次堆積して地山に至る。1号・2号墳と同様にこの古墳も旧表土と地山を削り出し、墳頂部は旧表土を残したまま約20cmの盛土を施して築造されたと推定できる。墳裾の北東隅と西側に直径約1.2mの焚火跡を検出した。遺物は出土していない。上層の堆積状況を観察しながら埋葬土体の精査のため発掘調査を全面に広げて表土層の剥ぎ取りを行ったが、その存在は確認できなかった。2号墳との新Ⅱ関係は上記のように3号墳が先に築造されている。

3. 元宮伝承地=平坦部の調査 (第4~6図 図版9~16)

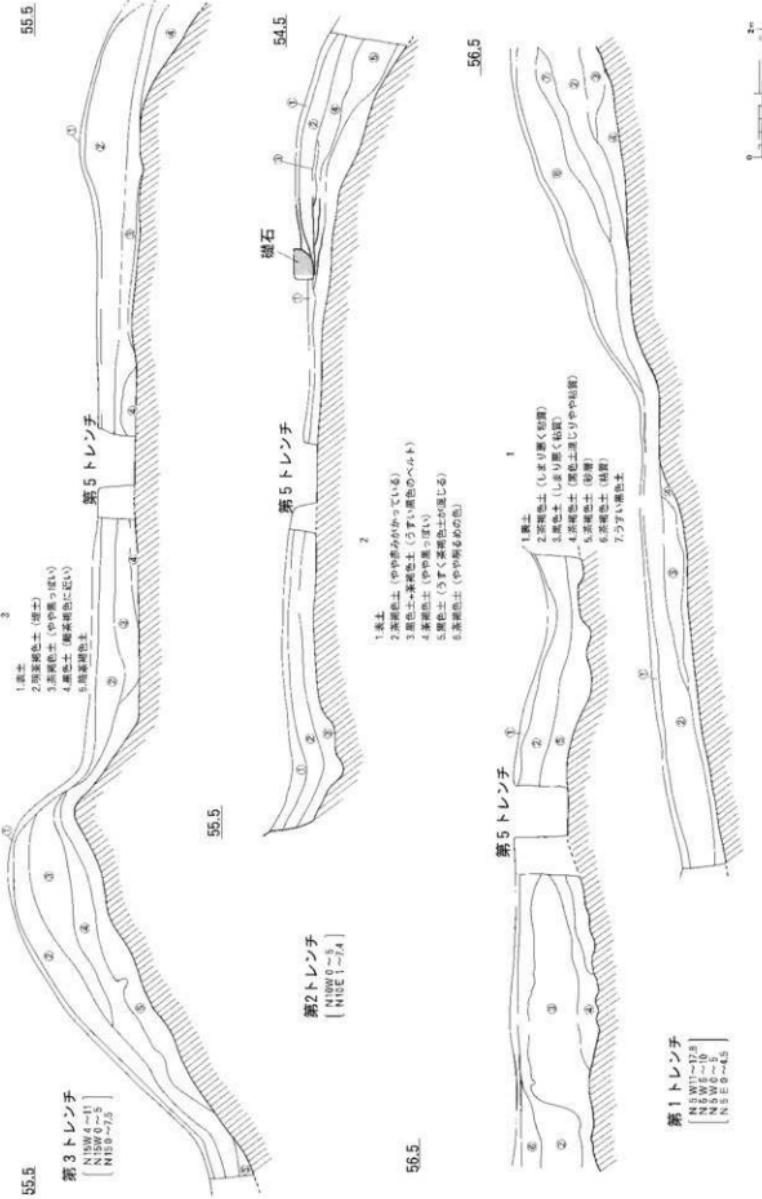
3号墳の南に延びる山広い尾根を削り出して壇状に平坦面4箇所が造成されている。第1平坦部と第2平坦部とは上墨・段・溝により、第3平坦部・第4平坦部は土墨・段により区画されていた。調査は、全体を1区(第1~第2平坦部)、2区(第3平坦部)、3区(第4平坦部)に分け、第1~第2平坦部を南北に縱断する第5トレンチ(主軸トレンチ・長さ35.0m)を設定し、さらに南端から5m刻みの地点で南北トレンチに直交する東西方向のトレンチ、すなわち第1トレンチ(長さ9.5m)、第2トレンチ(長さ12.5m)、第3トレンチ(長さ12.5m)、第4トレンチ(長さ14.5m)を設け、これらのトレンチを軸に1~9Gの調査小区=グリッドを編成してそれぞれの堆積状況を確認しつつ掘り下げた。また、2区は第5トレンチと同方向のトレンチ(長さ20m)を設定し、さらに第1~第3トレンチを西側に延長してこのトレンチと交叉させて上層状況を観察した。第3区について



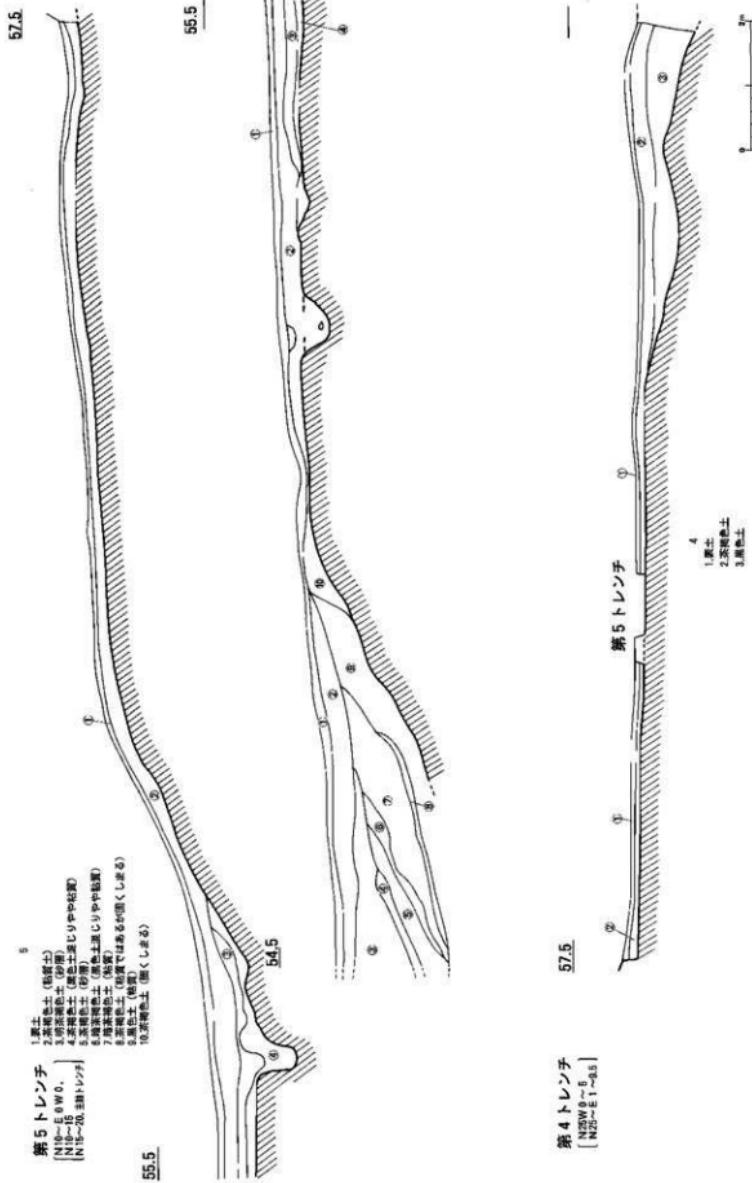
第3図 古墳調査前測量及び調査トレンチ



第4図 第1～第4平坦部地形及び発掘トレンチ図



第5図 第1～第3平坦部トレンチセクション断面図（その1）



第6図 第4、第5平坦部トレンチセクション断面図（その2）

は第5トレンチの南端から直角に折れて西に向かうトレンチ設定し、これをこの区まで延長、さらに西端で鉤手状に繋がる小トレンチを南向きに入れて調査した。トレンチの幅はすべて1mとした。

(第1平坦部=1区・6~7Gの北半分、8~9G) 第5トレンチ北側(N18~N32)と第4トレンチ(W5~E9)の交差部一帯に広がる平坦部である。尾根を大きく逆し字状に削り込み、東側斜面に盛り土して造成している。平坦部表上は5cm程度でその下部に茶褐色の粘質土層(厚さ0.1m前後)の堆積がみられた。これらを除去すると地山が頗れる。その上面はわずかに中央部が馬の背状に高く、東西側に少し傾斜する。

遺構としては、踏査時において中央やや北寄りに4m四方のごく低い台座状の高まり、さらに東縁にも低い土壘が確認されていた。そして発掘の過程では平坦面上の中央やや東よりの地点(9G)より円形の深いピット2基が近接して検出され、第5トレンチ内からも小ピット1基(N26)と礎石(N24)と思われる扁平な割石1個が検出された。礎石は表土下の茶褐色上面に載っていた。また、緩斜面(7G)でも円形ピット3基を検出している。この付近には礎石様の川原石4個があった。西側は尾根を削り込み上壠としているが、その基部は地山層を浅く掘り込んでいる。南側は段状に落ち込み、さらにゆるく傾斜して第2平坦部に移行する。境には浅い溝が東西に走っている。第1平坦部と第2平坦部の比高差はそれぞれの中央で2.3mを測り、第1面がかなり高い。

(第2平坦部=1区・1~5G、6~7Gの南半分) 踏査、樹木伐採の当初からこの平坦部では礎石様の石が北西側一帯に散在的に分布する状態が看取され、礎石処物の存在する可能性を示唆していた。石は扁平な川原石か割石で大型のものは長径が50cmを越える。中型は30cm前後、小型は20cm強である。確認した石の総数は20個(No.1~No.20とする)であるが、大半が3G区、6G区に集中し、一部は後に大型の柱穴様ピットの上面に置かれていることが判明した。また、2G区と4G区には径が60cmをオーバーする石も残されていた。なお、平坦部の西側、土壘に接する位置(2Gと3Gに跨る)に4m四方の低い台座状高まりが存在した。

平坦部全体の上層はあまり厚くなく、第1層—表土は約10cmの厚さで堆積しており、その下に茶褐色土層(厚さ10~20cm、数層に細分)がありこの層を介して真砂質の地山に至る。礎石と思われる石はこの第2層—茶褐色土層の上に位置していた。上軸トレンチ及び東西トレンチの土層状況を確認しながら調査区全体に発掘を進めていたところ、平坦部の南端(第5トレンチのN6地点)から地山の傾斜が急になり、その上部には数層(1層=表土、2層=茶褐色粘質土層、3層=明茶褐色砂層、4層=茶褐色・黒色土混じりの粘質土層、5層=茶褐色砂層、6層=暗茶褐色・黒色土混じり粘質土層、7層=暗茶褐色粘質土層、8層=赤褐色粘質土層、9層=黑色粘質土層、10層=赤褐色土層)に区分できる盛上様の上層が南に向かうほど厚く堆積していることが判明した。この互層状の堆積は数度にわたる平坦部の南方拡張に対応するものと思われた。9層(1G)からは大量の上師器(土師質土器、以下上師器とする)の杯が括状態で検出された。

第1、第2平坦部の西縁には南北方向の土壘が目視された。これの築造時期を特定するために第3トレンチを西側に延長し、土壘をカットして堆積状態を観察した。その結果は平坦部西側地山を

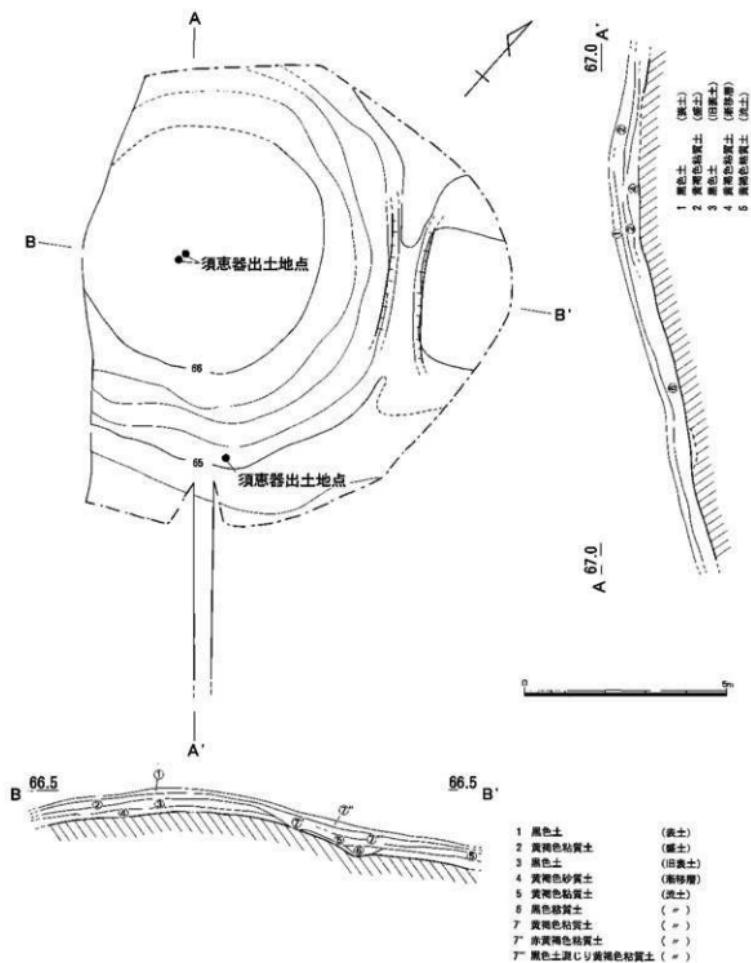
浅く掘り込み、その上に土盛りしていることが明らかになった。おそらく、平坦部を削平した際に出る廃土を西側に高く盛り上げて築造したものと思われる。中間層の第3層（茶褐色上層）と第4層（黒色上層）からは土師器の柱状高台付坏片（第12図8）、高台付坏（第12図10）、白磁碗（第12図7）等が出土した。平坦部の東縁は南縁と同様に地山が傾斜しており、その上に数層の盛土が認められた。この側にも廃土を使った拡張が行なわれたものと考えられる。

平坦部地山面上には厚さ10～30センチの土層（1層＝表土、2層＝茶褐色粘質土層、明茶褐色砂層、4層＝茶褐色・黒色土混じりの地山直上層－黒色土層と表示）が堆積していた。地山面からは略方形に分布する大規模な柱穴が多数検出され、掘立柱建物の存在したことが確認された。ピットの径には大小があり、プランも円形、楕円形・隅円長方形、長楕円形等に概略区分でき、深さも20cm未満、21～40cm、41～60cm、61～80cm、81cm以上に分けられる。大型で長楕円形プランのピットは略方形状に分布しており、メインの掘立柱建物が平坦部のやや北西寄りに建っていたことが推定される。さらに、これらいくつかの柱穴には数度の重複があり（例えばP6を切ってP7が掘られている）、少なくとも2回以上の建て替えが行なわれたことを示している。そして、第3トレンチ西側（N・15・W0-11）の最下部＝地山直上から鉄製の刀子が、2G、5～7Gの地山直上の黒色土層から鎌・釘・鉄滓・鉄塊が、平坦部各所から古錢等が出土した。また点数は少ないが、各トレンチの黒色上層から土師器・坏片（第23図39、40、43、第26図87）が出土している。

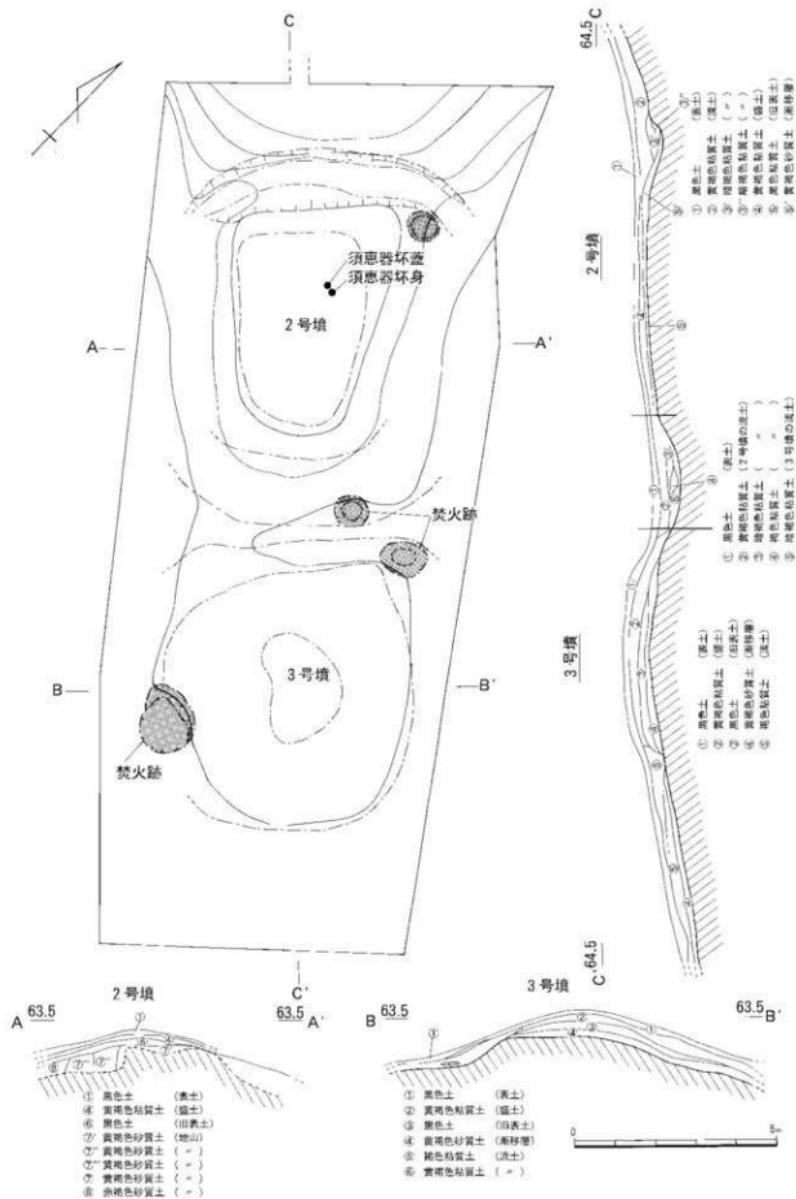
〔第3平坦部＝2区・第4平坦面＝3区〕 第3平坦部は第2平坦部の南西でみられた。第1トレンチ西側の土層断面では地山の高い部分を浅く削り、低い箇所を埋めた平坦部がみられた。同様の傾向は第5トレンチの南端から西向き直角に折れるトレンチ（長さ25m）でも認められた。また、南北方向については土塁西側の裾近に沿って第5トレンチに併行するトレンチ（長さ9.8m）を設定して状況を観察した。その結果、地山面は南北方向に小さく傾斜すること、第3トレンチの延長部付近で地山が大きく皿状に落ち込んでいることが判明した。この凹部を埋めている上は黒っぽい茶褐色上で、その上部には第3平坦面全体を覆う第2層＝茶褐色土がみられた。ここに人工の幅広い溝状造構が存在したことになる。

以上の調査状況からすると、この平坦部は元々南西方向に緩く傾斜しており、その山側を削り、谷川の低い部分を埋めて平坦面としたことが考えられる。その後に部分的には第2平坦部からの廃土がこの平坦部を覆ったと判断された。トレンチ内の地山直上からは須恵器の坏が出している。

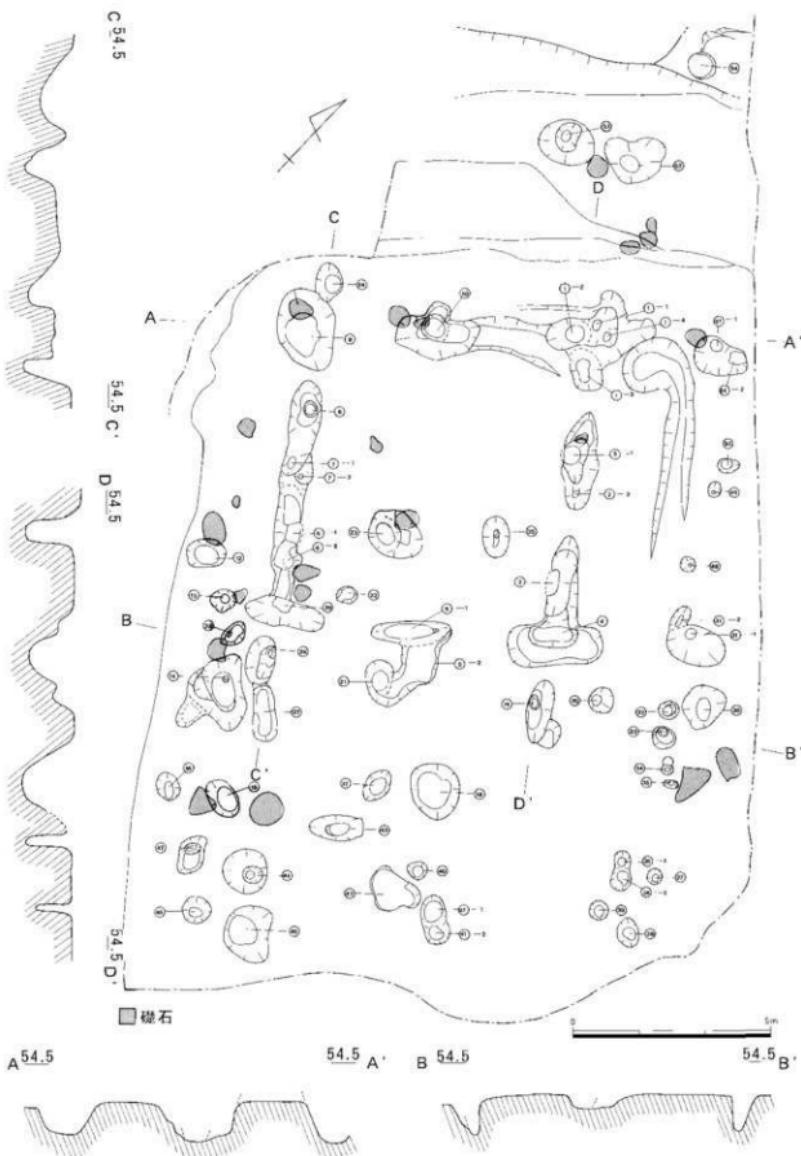
第4平坦部は第3平坦部南西を段状に削り込んで造成された小規模な面である。造成の仕方は第3平坦面と同様であり、地山上面の全面に第2層＝茶褐色土が広がっていることから第3平坦面と同じ時期に機能していたことが考えられた。



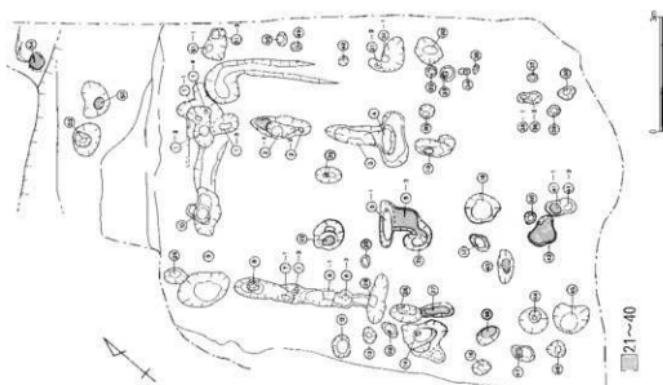
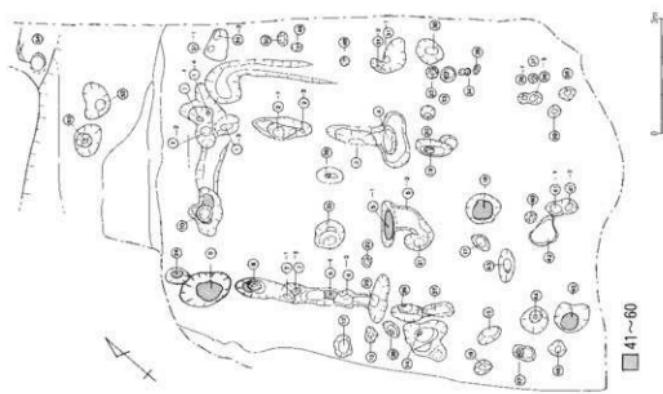
第7図 第1号墳検出状況及び土層断面図



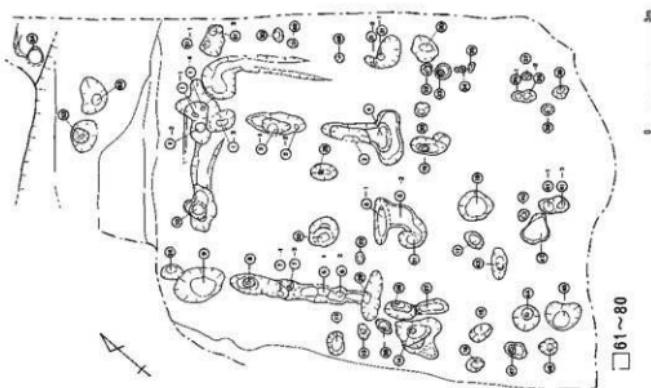
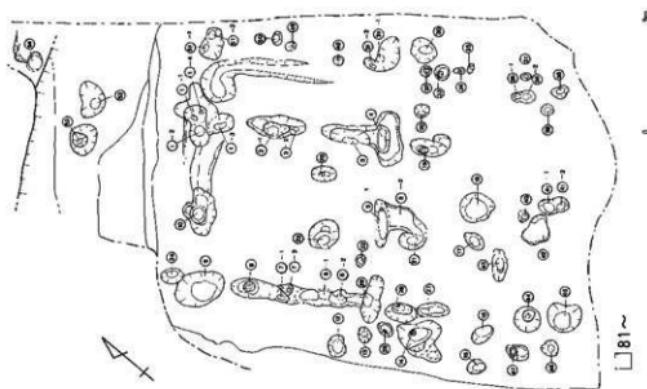
第8図 第2、第3号填検出状況及び土層断面図



第9図 第2平坦地、平面図、磁石配置図



第10図 ピットの深さ分類図（その1）配置図



第11図 ピットの深さ分類図（その2）配置図

第2表 ピットの深さ

	A	B	C	D	円	梢円	胸円長方	長梢円	ヒザゴ	その他
1-1			51			36×29				
1-2			64					68×49		
1-4			44			29×23				
2-1			66					111×51		
2-2	30				48×48					
3			84					123×38		
4			71				143×65			
5			59					126×37		
6-1			60					150×42		
6-2	24				49×39					
7-1	24				68×37					
8			65					98×50		
9			44			133×94				
10			67				125×92			
14			41			113×84				
15	28				63×42					
18			45							87×80
19			55					96×38		
23	24				91×72					
24	49				63×42					
25	29							65×43		
26			50					76×45		
27			32					86×36		
29			67					125×43		
30			66							70×69
31-1			73					95×60		
36	25								60×32	
38	27				47×34					
41	32							76×41		
42	22									69×67
43	39							86×40		
44	31				73×69					
45	52									87×70
46	22				46×44					
47	22						57×41			
51-1			75			63×45				
51-2			21		44×45					
52			34							95×70
53			44			89×71				
54			22		45×44					

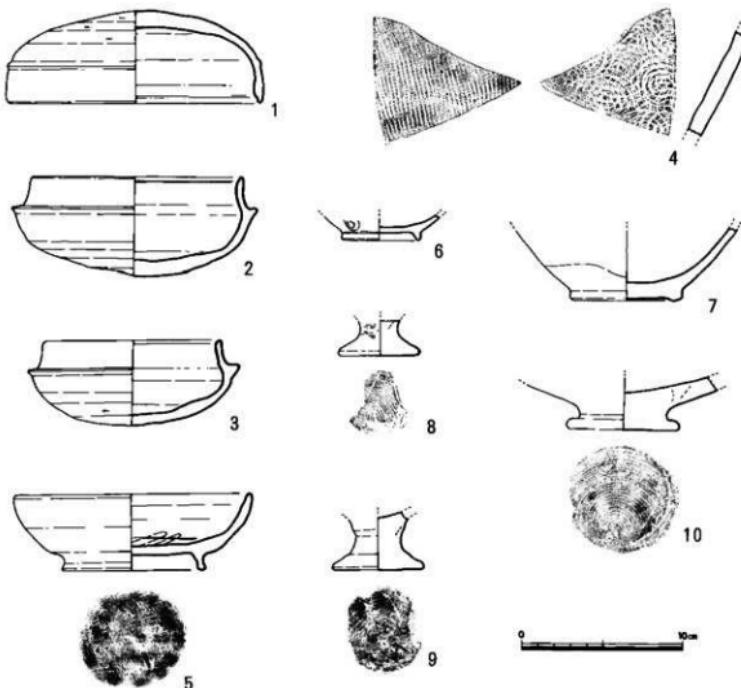
- 注：① 深さ A = 21～40cm
 B = 41～60cm
 C = 61～80cm
 D = 81cm以上
 白抜きのピットは深さ20cm以下
 ② 深さの測定はピット検出面より穴底まで。
 ③ 測定数値の単位はcm。

第4章 遺構と遺物

1. 古墳の構造と遺物 (第7~8図 図版1~8)

(墳形と主体部) 1号墳：最高部に築造された方墳である。西側が崩落し、北側も地形が変形しているので正確な規模を測定することはできないが、径約10m程度、高さ約1.7mの円墳と考えられる。自然の高まりを利用した古墳で、墳端は地山を浅く掘り込んだ溝（上巾1m、下巾0.6~0.7m）で区画し、墳丘は薄く盛り土をして整える。主体部については精査したが、それらしき遺構を確認することはできなかった。

2号墳：1号墳の南に続く尾根上にあり、東西方向の溝で同墳と区分けする。この溝は1号墳の南端裾部を少し削り取って緩く湾曲している。東西の墳裾は斜面崩落のため確定できない。南端は3号墳との間にも円形に溝を掘って区画している。これらにより想定される墳形は円形で規模は径約9.58m程度と推定される。高さは約1.3m。北東隅と南東部では焼き火跡とみられる浅い皿状の



第12図 出土遺物実測図 (須恵器、陶磁器)

ピットがある。墳頂部から須恵器蓋坏の蓋・身が出土した。

3号墳：2号墳の南に続く尾根上にある。地山を削り出し、薄く盛土をして墳丘を造成している。大きさが径約7.4m、高さ1.2m程度の円墳と見られる。北東隅と墳丘西側の墳端近くで浅く掘り深めた焚き火跡が検出されている。

(遺物) (第12図1～4、図版17) 1号墳の墳頂から須恵器の小型蓋片(4)と南西側の墳裾で須恵器蓋坏の身(3)が出土している。蓋片は外面に蓆状の細かい平行叩き目、内面には細溝の同心円文がみられる。いずれも入念な施しである。坏身は体部が深く湾曲し、受け部が太く短く斜め上方に突出。立ち上がり部の高い占相の坏身である。大谷(出雲)II期に比定できる。

次に2号墳の墳頂からは須恵器の蓋坏の蓋と身が(1、2)出土している。両者は並んだ状態で検出されているのでセットと考えることができる。蓋(1)は天井部が緩く湾曲し、体部から口縁部は垂直に近い。天井部と体部の境に段状の突帯が巡る。口唇部には段状の切り込みがある。身(2)も体部が緩く湾曲する深みのある器形で、受け部が短く水平方向に突出し、立ち上がり部は高い。口唇部には段状の切り込みを施す。ずれも大谷(出雲)II期に比定できる。

2. 元宮伝承地・平坦部の遺構と遺物 (第9～11図、第2表 図版9～16、18～29)

(第1平坦部) 尾根を広く段状にカットして造成した平坦部(標高56.7～56.9m)である。したがって、北側は2m強の崖面、西側は土堤状に尾根の残部が南北に延びる。東側は斜面を埋め、南側は地山を斜面状に削って第2平坦部に繋げている。平坦面の形状は台形で東西12～14m、南北約9～12mの広がりをもつ。面積約130m²。地山面は東・南に向かってわずかに傾斜する。西側の土堤は基底部巾約4m、高さは北側で約1.5m、南側で約50cm程である。東縁の上堤状の高まりは下巾約3m、高さは20cm位である。なお、南東の傾斜面では3個のピットが検出された。形状と大きさ、深さは第2表に示した。機能は不明である。

平坦部面には1個の礎石と3個の柱穴がみられた。発掘以前にも東南部には数個の礎石様の石が積まれていたことなどから当平坦部に礎石建物が存在したことが推定される。また、3個の柱穴様ピットも礎石建物に先行する建造物のあったことを示唆するかのようである。「雲陽誌」によると「松尾人明神・王子権現」の本殿が建立されていたとするが、検出された礎石・柱穴様ピットからは具体的な建物像を想定することは難しい。

(第2平坦部) 第1平坦部の南に続く略長方形状の平坦部(標高53.6～54.6m、第1平坦部より約2m低い)である。北西部には尾根を削りこんだ第1平坦部西側の上堤が延びており、北側は浅い溝を介して第1平坦部の段状傾斜面に続いている。東側は尾根斜面に埋め土して平坦面を拡大するが縁沿いには低い土堤状の高まりがある。南側も斜面に盛土し、同様に平坦部を広げている。平坦部の大きさは東西約10～13m、南北約13～20mである。南東部に切り込むような形で敷設された「参道」が平坦部の建設と同時に設けられたものであるか否かは不明。この平坦部中央より北側にかけて大小約50個のピットが検出された。これらはいずれも地表面もしくは直上層からの掘り込みが確認されて

いる。ピット群の分布状況や複合状態から2棟以上の掘立柱建物の存在したことが想定される。

当初観察された礎石様の右の一部は地山上面を覆う薄い茶褐色土層に埋め込むような形で据えられたものと茶褐色面に据えられて上面が表土上に露出するものの2形態が存在した。このことからは第1平坦部と同様に掘立柱建物に次いで礎石建物が時期を遡えて造立されたことを教えている。

(建物の構造) 第1平坦部、第2平坦部で認められた建物について以下その規模と構造について検討しておく。

礎石跡物跡1号：第1平坦部に存在した建物である。扁平な割石等を礎石とした建物と考えられるが、詳細な規模・構造はまったく不明である。

礎石跡物跡2号他：第2平坦部に存在した建物とする。石No.1～No.4はいずれも大型ピット上面に位置する。No.3以外は中型の扁平川原石である。これらが原位置をあまり動いていないとすれば大型ピット1の上面に一石を補うと3間の柱列が復元できるので、このラインを北壁とする建物が存在した可能性が考えられる。柱間は約1.7mである。西側上墨寄りで検出された石No.5（中型）、同No.8（大型）、同No.14（中型）、同No.15（中型）も約1.7m間隔で並ぶ。ラインが直線をなさないという問題はあるが、上記のように原位置近くに残されていると仮定すれば4間の西壁を想定しうる。結論として3間×4間の礎石建物が復元されることになる。これを礎石跡物跡2号とする。しかし、右No.6、同No.9、同No.12～13も原位置からあまり動いていないとすれば、想定外にも礎石建物があったとしなければならない。石No.16～No.18のような大型礎石が想定建物の枠から大きく外れた位置で検出されているので、これらが仮に原位置から移動したこと考慮するにしてもさらに別棟の建物の存在を考える必要があるのかもしれないし、確実に2号の礎石群よりも下層に位置した礎石も存在したのであるから先行する礎石物を予測する必要は十分あるといえる。なお、小型の石は、例えば右No.10のように大型ピットの中に転落したような状態で検出されているので、大型礎石の安定補強材として使用された可能性がある。

掘立柱建物跡1号：第2平坦部では50個所を越えるピットが検出されている。形状・大きさ・深さも様々である。そこで各ピットの形状・大きさ・深さ（A～D）等を第2表のようにまとめ、ピットの並びを主たる基準にして建物の復元を試みた。調査段階でピットの複合状態等から2棟以上の掘立柱建物の存在が推定されたわけであるが、その一を1号棟、その二を2号棟として規模・構造を想定した。

掘立柱建物1号としたものはP 1-1（円・B）～P 2-1（長楕円・C）～P 3（長楕円・D）～P 19（長楕円・B）～P 26（長楕円・B）～P 6-2（長楕円・B）～P 8（長楕円・C）～P 24（楕円・C）のピットで結ばれる建物である。南北長辺が5.8m、東西短辺が4mと計測できる。長辺の柱間は3間で柱間隔は1.9m強。問題は南北の壁で、北壁ラインには中間のピットが存在しないことと南壁ラインの中間に位置するP21が柱穴とするには浅すぎる嫌いがある点である。しかし、他の柱穴とみられるピットは形状・大きさ・深さそれぞれが相似した状態にあることから、これらをもって一棟の建物として扱うことは許されるのではないだろうか。北壁ライン上に中間の柱が存在しないのは上段（第1平坦部）の本殿と結ぶ連絡廊（礎石建物か）が設けられたことと関連するの

かも知れない。

掘立柱建物跡2号：P1-2（楕円・C）—P2-2（円？・A）—P4（隅円・C）—P5（隅円・B）—P7-1（楕円・A）—P9（楕円・B）—P10（隅円・C）の各ピットを繋げる建物である。柱間は2間×2間、辺長は南北が若干長く4.6m、東西が4mと計測される。南北の柱間は2.3m、東西柱間は2mである。この建物は、建物1号に属するとみたP8が本建物柱穴のP7-1を切り込んで掘られていることから1号に先行する建物ということができる。壁の方向は1号建物より5度西に振れる。

その他の遺構について：第2平坦部で検出されたピット群の主要なものは以上の1号、2号とした2棟の建物を復元することで連結することができる。復元の壁ラインが柱穴の芯々を確実に捉え切っていないといった問題があるにせよ大型ピット群が平坦部北西に略方形状を呈して分布することはここに大規模な掘立柱建物が存在したとする認識の確かさを示すものである。同時にピット同士の複合とか礎石建物が後出で建立されていることなどからは数度の遷宮が行なわれたことも認めなければならないであろう。そして、これらが第1平坦部より一段低い第2平坦部に造立されていることからすれば方形状に分布するピット群の建物が拝殿であった蓋然性も高いとすべきであろう。

第2平坦部には2棟の建物跡には属さないピットが多数存在している。中にはP51（不整隅円・A・B）、P30（楕円・C）、P31（楕円・C）等の大型ピットがある。これらは建物を支えるメインの柱穴の一部である可能性が高い。同様に1号、2号の建物の南に分布するピット群も建物の存在を考えさせる一群ではあるが、整然とした配列を組み立てることはできない。その他、復元建物の東に平行する腰手状の溝状遺構が存在する。あるいは雨水を受け流す溝かも知れない。いずれにしても、残された遺構群のみから拝殿の正面を想定することは難しいが、背後に本殿があり、拝殿と本殿を結ぶ連絡廊が第1平坦部南辺のスロープにあったとすれば（掘立柱建物の北側には浅い掘り込みがある）、拝殿正面は復元建物の南側にあったことになる。そして、長軸が南北に置かれていることからすれば妻側が正面であったことも考えられよう。

平坦部中央で土壘に接する方形台座状の高まりは最新の建物にともなう遺構であろう。また、西側上段は地山を削って基部をつくり、その上に盛土して高上げしていた。

（遺物）第2平坦部から多量の遺物が出土し、第3平坦部でも土師器の小片と須恵器环が1点出ている。その中で圧倒的な量を占めるのが土師器で、須恵器・陶磁器が少量ある。これらの他に鉄器類と鉄塊・鉄滓・古銭も数点出土した。また、第3平坦部で須恵器1点が得られている。第2平坦部の南埋め立て拡張部（第5トレンチ・1G）の黒色土層からは土師器が一括状態で出土し、平坦部中央の地山直上層からも土師器片がえられている。さらに土壘の断ち割りトレンチの茶褐色土層から黒色土層にかけて土師器の柱状高台付环や白磁碗片等が検出された。土師器については型式的検討を要すると判断するので章をあらためて解説するが、黒色土層もしくは地山直上層の形成が平坦部と土壘構築の初源期に当るとみられ、ここに包含された土器群がその年代を示すものと考えられる。ここでは取り敢えず須恵器・柱状高台付环・高台付环・陶磁器、鉄器類・鉄滓等、古銭につ

いて記載する。

須恵器・陶磁器（第12図5～7、第3表、図版18-1・2・3）：5は第3平坦部出土の須恵器・高台付杯。底部には静止糸切り痕がみられる。体部は逆「ハ」字状に湾曲して開き、口縁端部は尖る。大谷（山陰）Ⅷ期に比定できる。7は白磁の碗である。高台は削り出して低く厚い。体部内外面に施釉。釉は貫入。12世紀頃のものと思われる。6は近世陶器の碗。体部が逆「ハ」字状に開く。内外面に施釉。

鉄器・鉄滓等（第13図1～13、第4表、図版19）：1は曲刃鎌である。ほぼ完形を保っている。刃部の巾が広く、先端が短冊状になる。着柄部は刃部に対して鈍角をなし、長二角形を呈する。全体に器厚で頑丈な感じを与える。2～9は釘である。三類が認められる。i類は6に代表される小型品で頭部が逆「L」字状をなす。身の断面は長方形を呈する。ii類は3のような中型品で、頭部はi類同様に逆「L」字状。身断面は長方形である。iii類は4のような大型品で一見鑿のような形状を示す。頭部、身断面ともに長方形を呈する。以上の他に鐔、鞘金具、刀子等の鉄製品が出土しているが、保存状態が悪く、図示できない。

10は鉄滓である。薄く、丸餅状を呈し、赤黒い錆が付着している。鍛冶滓と思われる。11は鉄塊系遺物である。一面に緩く湾曲する面を残すが、他の広い面は破断面で比較的重量があり、気泡状の孔も認められない。一次製鍊の鉄塊と考えられる。12、13は小型の金属滓である。黒灰色を帯び、形状は不定形。無数の小気泡孔がみられる。

その他（第13図14）：14はミニチュアの狛犬の頭部。粘土製である。

古銭（第14図1～7、第5表、図版20）：1～5は寛永通宝である。1、2は「ス宝錢」、3は「文錢」、4は裏面に「元」の文字がある「高津錢」、5は「八寶錢」で裏面に文字はない。6は無文錢。7は明治13年製の一錢銅貨である。寛永通宝はこの他にも6枚が得られているが、鋳化がひどく、図示しない。

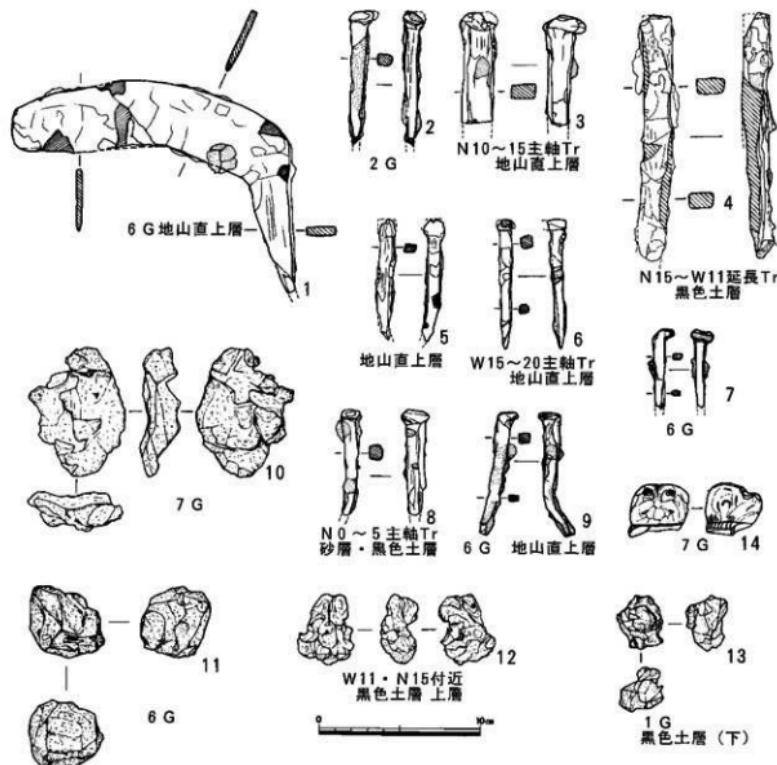
参考文献：大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11 1994年

鉄塊・鉄滓については、角田徳幸氏（島根県埋蔵文化財調査センター）から教示をえた。

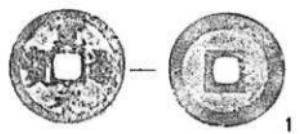
第5章 出土土師器について

1. 出土状態とその意義

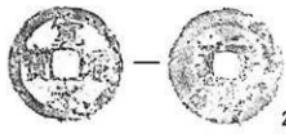
主として第2平坦部からは上師器が大量に出土した。器種はほとんど壊・皿で、それらは第5トレンチ1G・黒色土層から一括状態で検出されている。完形を保ったままの個体はあまりみられないが、1/2～1/3程度の個体が多く、形状をうかがうに支障はないと考える。これにより第2平坦部の掘立柱建物跡の所属時期と神社祭祀の一側面を知る手掛かりが得られたしてよいだろうし、この種の土器の編年的考察にとっても有益な資料と思われる所以以下壊・皿に関してその形態と器面調整による分類を施して土器群の特徴と年代的位置をうかがうこととする。



第13図 出土遺物実測図（鉄器、鉄滓等）



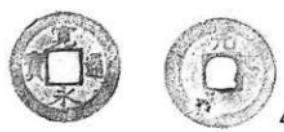
8 G 西側土手斜面
表面



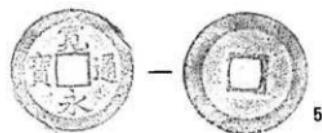
7 G 地山直上層



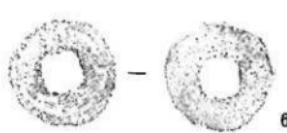
W20+70cm Tr



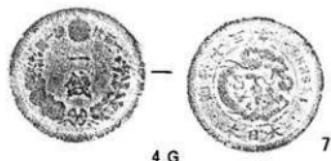
W20+70cm Tr



2~3 G 西側土手西斜面
表面



N15~20主軸Tr
地山直上層



4 G



第14図 出土遺物実測図（古銭）

2. 分類の方法 (第15~20図、第6表)

- i) 形状の分類：体部から口縁部にかけての開き具合による分類である。その1は内湾する群、その2は外傾する群、その3は外反する群の3群に分ける。
- ii) 器の口径と器高の比、口径と底径の比により、内湾・外傾・外反の3群中にさらに小群が設定できるか否かの検討を行なう。
- iii) 器面の調整と仕上げの観察。出土した壺のすべてがロクロ成形による回転ナデ跡をもつ(底部も含む)。その上で水簾粘土を全体に薄く塗布して仕上げを施す。これを仮に「化粧塗り」技法としてその存否を検討する。
- iv) 底部と体部の境に残る段状の窪みを「しぶり」と仮称し、窪みの程度から強く「しぶる」もの=a、弱い(浅い)「しぶり」のもの=b、「しぶり」が認められないもの=cとする。「しぶり」の強弱現象が生じるのは回転糸切りによるロクロからの切り離しの際に糸を掛ける個所によるという(柏原恒平氏教示)。

3. 群とゾーン分け

(内湾する群) (第15・18・21~23・26図 第6表 図版21~24-2、29-4・5)

内湾する群に属する壺・皿として第21~23図1~36、第26図103、104の38個体を示す。ii)により口径と器高の比による分布(第15図)、口径と底径の比による分布(第18図)で、そのありようをみる。前者では口径11.5~14.5cm、器高3~4cmの間に80%弱が集中する。さらに、口径12.5~13.5cmの枠内には12個体=30%が密集している。後者でも口径11.5~13.5cmと底径5.0~6.0cmの間に21個体=45%が集まる。これらを第1ゾーン群とする。ここに含まれる個体についてiii)、iv)項を検分する。

代表的なものは14である。調整はナデのみ。「しぶり」はcで口縁端部は丸味をもつ。他に12、13、15~19、20が含まれる。6、7、11、21、27~29も第1ゾーンの外縁付近に分布する。6はナデ調整、「しぶり」b。7はナデ・化粧塗、「しぶり」はb。11はナデ・化粧塗、「しぶり」がa、スス付着となる。12はナデで外面にスス付着。「しぶり」はb。13はナデ。「しぶり」はc。15~17はナデ・化粧塗。「しぶり」はb。18はナデ・化粧塗。「しぶり」はc。19はナデ。「しぶり」はb。20、21はナデ・化粧塗。「しぶり」はb。27、28ハナデ・化粧塗で「しぶり」はbである。29はナデ・化粧塗、「しぶり」はc。第1ゾーンに属する個体は個数が多く、外面調整、「しぶり」に際立った様相はみられない。もっとも標準的な個体の集団といえる。

第2~第4ゾーンには第1ゾーンの外縁部に分布する個体を当てよう。第2ゾーンには15図、18図にみられるように口径、器高、底径が相対的に大きい(口径13.5~15cm、器高3.5~4.5cm、底径5.5~6.5cm)個体が含まれる。代表的なものは8で、調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はa。口縁端部はやや角張る。5がナデ・化粧塗。「しぶり」はc。3はナデ・化粧塗、「しぶり」はbである。D図でみれば9(ナデのみ、「しぶり」b)もこのゾーンに属させることができよう。

第3ゾーンは第2ゾーンの反対エリアにみられる。器高が第1ゾーンよりやや高い(3.9~4.3cm)。22~25、31、36の6個体が含まれる。24(ナデ・化粧塗、「しぶり」a)が代表的個体。22はナデ・化粧塗。「しぶり」がb。口縁端部は丸味をもつ。23はナデ、「しぶり」がa。25もナデ・化粧塗、「しぶり」がaである。31、36はナデ・化粧塗、「しぶり」bとなる。

第4ゾーンは第3ゾーンよりさらに口径(11.2~11.6cm)・器高(3.4~3.6cm)共に小さいエリアに位置する。内湾群中でも最小群とccessすることができよう。30、35、36を含める。30の調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はa。35はナデ。「しぶり」はc。36は調整はナデで。「しぶり」はbで口縁端部は丸味をもっている。

103と104は小皿である。形状が内湾を示すのでここに掲示した。

以上、内湾する群を第1~第4ゾーンの小群に分けて概観した。内湾群にはこれら小群に組み込めない個体がいくつか存在する。1は口径・底径・器高とも大きく、第15図の右上に孤立的に位置している。ナデ・化粧塗、「しぶり」はbでiii)、iv)項について他個体とほとんど同じである。また、33は第3ゾーンの左に離れて存在する。口径が小さく、高さも内湾群中で最も小さい。しかし形状では内湾群を代表するような形を示しており、調整が入念で、回転糸切り跡も密な同心円が鮮明に残っている。優品といってよい。あるいは搬入されたモデルかとも推測される。こうしたゾーン外の個体をどう評価するかが問題となろう。

(外傾する群)(第16、19、23~26図 図版24-3~29-2)

外傾する群に属する壺として第23~26図37~89の53個体をあてる。当遺跡出土土師器・壺の主体を占める群である。口径と高さの比により第1~第5ゾーンに分ける。内湾群と比較すると少し密集度が高く、ばらつきもわずかに小さい。口径が12~14cm、器高3~4.5cmの範囲に約70%が集中している。

第1ゾーンには37と38の2個体を入れる。口径は大きい(14.5~15.0cm)が器高(3cm前後)はやや低い。37は調整がナデ。「しぶり」はaで口縁端部は尖っている。38は調整がナデ・化粧塗で外面に指圧痕が残る。「しぶり」はb。

第2ゾーンは(口径14~14.5cm、器高3.3~3.9cm)に収まる個体である。41に代表的される。調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はb。43はナデで「しぶり」はc。45もナデ・化粧塗。「しぶり」がc。71はナデ・化粧塗。「しぶり」がbである。

第3ゾーンは(口径12.0~13.7cm、器高3.8~4.4cm)は密集区のなかでも器高が相対的に高い小群である。39、46~51、53、59、65~69、74の15個体で48に代表される。48は調整ナデ。「しぶり」がb。39、46の調整ナデ・化粧塗。「しぶり」c。47は調整ナデ・化粧塗?「しぶり」b。49~51、53は調整ナデ・化粧塗。「しぶり」aとなる。59は調整ナデ・化粧塗。「しぶり」c。65~67は調整ナデ。「しぶり」b。68は調整ナデ・化粧塗。「しぶり」b。69は調整ナデ・化粧塗。「しぶり」c。74が調整ナデ。「しぶり」aとなる。

第4ゾーンは第3ゾーンより器高が低い小群(口径12.2~13.7cm、器高2.8~3.5cm)である。40、

42、44、52、54、57、60～65、70、73、75～78、80の21個体を含める。代表する個体は54で60も平均的な個体といえる。54は調整がナデ雑な化粧塗が施されている。「しぶり」はb。60は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はc。器壁は厚く、口縁端部は尖り気味になる。40、42、44、52、60、62、63、75、80は調整ナデ・化粧塗。「しぶり」がc。57、61、64、65、76～78は調整ナデ・化粧塗。「しぶり」がbとなる。

第5ゾーンは第1ゾーンの対極、つまりもっとも左側に位置する小群である。範囲は口径10.8～11.8cm、器高2.8cm～3.4cmで、72、79、82～85、87～89の9個体が含まれる。ゾーンの中央に位置する個体がみられないでゾーン縁に近い85を図示した。調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はc。口縁端部は丸味をもつ。その下に位置する82は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はc。72、83は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はa。79、84は調整がナデ。「しぶり」はc。85、88は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はc。88は体部下半部の器壁が厚く、上に向かって次第に薄くなり、尖り気味の口縁端部で仕上げている。87は調整がナデ。「しぶり」はbである。89は調整がナデ。「しぶり」はbである。これらはいずれも88と類似の器壁状態を示していて、小群としての形態上のまとまりが看取される。第5ゾーンは第1ゾーンとともに外傾群の中ではやや異なった位置を占める小群といえる。

以上のように外傾する群は、これを大きくみると、第4ゾーンの60辺りを中心にして半径1.5cmの範囲に大半の個体が密集している。おそらく口径13.0cm、高さ3.5cm辺りを基準に制作が行なわれることの反映であろう。

(外反する群) (第17・20図、第26図90～102、105、図版29-3)：この形状に属する個体は13と少数である。口径11.9～13.4cm、器高2.7～3.7cmの範囲に9個体(91～97、100、101)が含まれ、もっとも右寄りの90、最高部の98も上記の範囲に接続しているので大きくはこの2個体も同一ゾーンとして扱うこともできる。やや隔離的に存在するのは102だけである。105は小皿である。90は調整がナデ。「しぶり」はbで、器壁が厚く、口縁端部は小さく外側に折り曲げる。91は調整がナデ。「しぶり」はc。92は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はaである。93、94、96は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はc。口縁端部は小さく尖る。95は調整がナデ。「しぶり」はb。97は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はaで器壁が厚い。99は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はc。100は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はa。口縁端部が尖る。101は調整ナデ。「しぶり」c。ゾーンを外れる98は調整がナデ・化粧塗。「しぶり」はbで、器壁が薄く、口縁端部が鋭く尖る。同じく102は調整ナデ。「しぶり」a。

外反群は個体数が少なく、口径12～14cm、器高2.7～3.9cmの範囲にほとんどが含まれる。このことは外反群が外傾群、内湾群とは異なり、限定された制作単位であることを示唆するのであろうか。

4. 群分けと調整の意義

大崎元宮遺跡出土の土師器の主として壺を対象として形状と大きさを基準項目に3群10小群(ゾー

ン)を分類した。これら群・小群がどこまで上器制作上の事情を反映するのか推察は難しい。あり体にいえば、異なる作者の個性の表示とみるか、あるいは同一作者の「くせ」もしくは制作条件の違いによる偏差とみるかはにわかには決し難い。参考になるのはどの個体分布図(第15~第20図)においても左右への広がりが上への広がりよりも大きいということである。この事実は口径・底径の個体間偏差が大きく、器高のそれが小さいことを示している。複数の作者がほぼ一齊に制作した結果とみることも可能であるが、あくまでも推測の域を出ない。こうした問題への接近は、さらに多くの資料を蓄積したうえで時間を掛けることが必要であろう。ここでいえることは外傾群が上器群全体の主流をなし、これに内湾群が続き、外反群は隨伴的な位置に止まるということである。そして、大半の個体が第5トレンチ南端の黒色土層から一括状態で検出されていることを思えば、群差は時期の違いを示さないことを確認するべきであろう。

器面調整、「しづぼり」の観察から留意されることは、どの個体も入念なタッチで成形されており、かなりの個体に化粧塗の施されていることや回転糸切り跡をナデケシすること等が知られた。また、それぞれの群には数個の精緻な造りの個体があり、一種のモデルが存在したことを想定させている。今後の検討課題であろう。

5. その他の土師器 (第12図8~10 図版18-4)

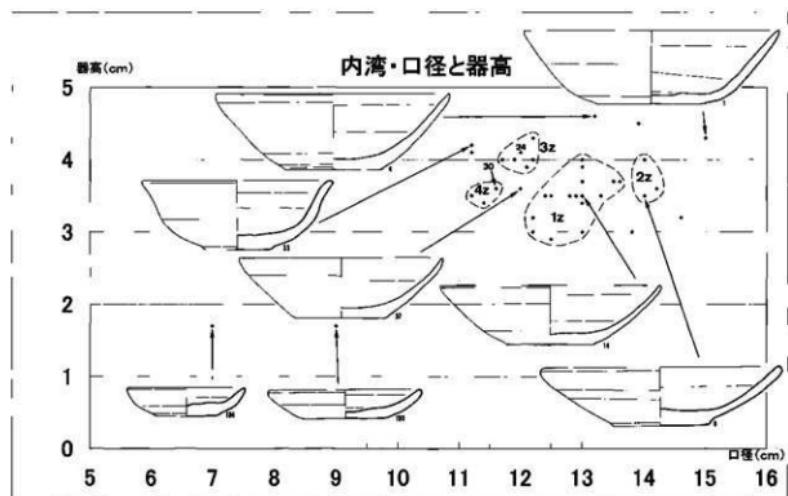
以上の壺・皿の他に高台付壺もしくは塊(10)と柱状高台付の壺片が2個(8、9)出土している。前者は円盤状の低い高台に体部が載る形式である。高台の外面には整然とした回転糸切り痕がみられる。後者は同じく壺部を欠いているが、柱状の特徴的な高台である。いずれも台底面に回転糸切り痕を残しているが9は風化して不鮮明。8の回転痕跡は10と同様である。

6. 時期について

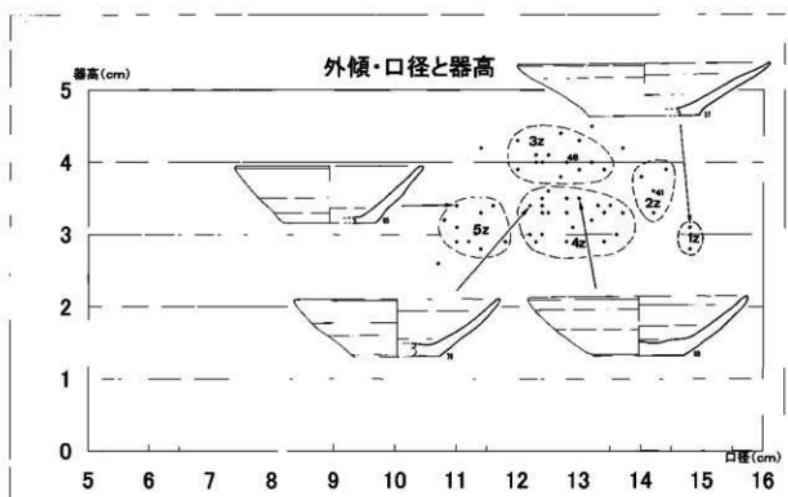
最後にこれら十師器群の所属時期を考察しておきたい。口径が比較的大きく、器高も高いことが全体的な特徴であるが、これのみで時期を判定することには不安がある。そこで内湾・外傾・外反の形状、柱状高台付壺や中国製陶磁器(白磁)等とこれら土師器が出土層を共通にしているので同じ土器群として扱って差し支えないことから類似十器群のセットを求めるならば松江市天満谷遺跡SD-01・02山上の上器群が参考になる。天満谷遺跡の該遺構出土品には白磁碗と柱状高台付壺をともなっており、上記した本遺跡の十器群の様相と共通するところが多い。ここでは天満谷遺跡の時期比定に準じて12世紀頃の所産としておきたい。

参考文献：広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』8 1992年

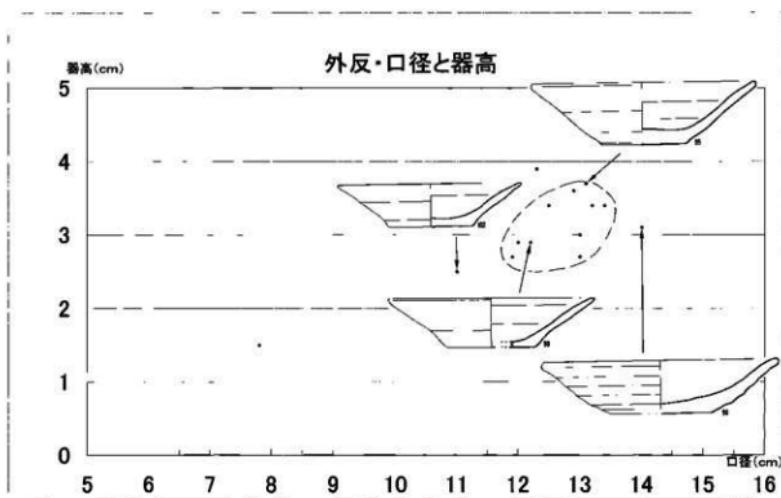
本章の上器分類については袖原恒平氏(西ノ島町教育委員会)から多人な教示をえた。負うところを明らかにし、感謝を述べる。



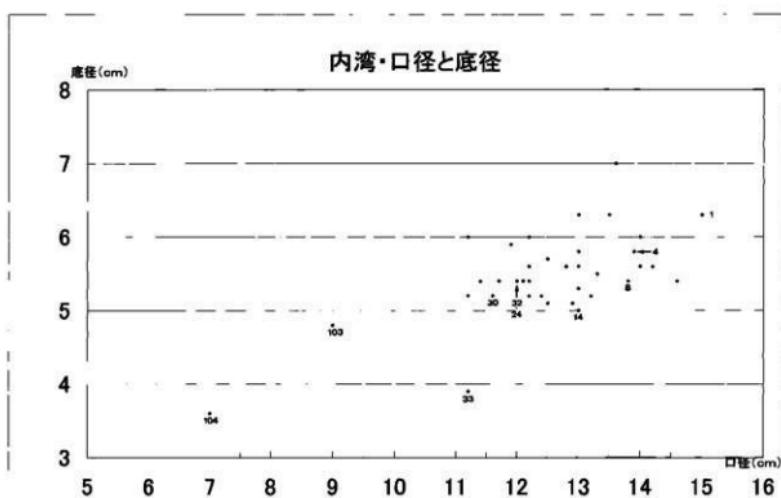
第15図 土器の大きさ分布図（その1）



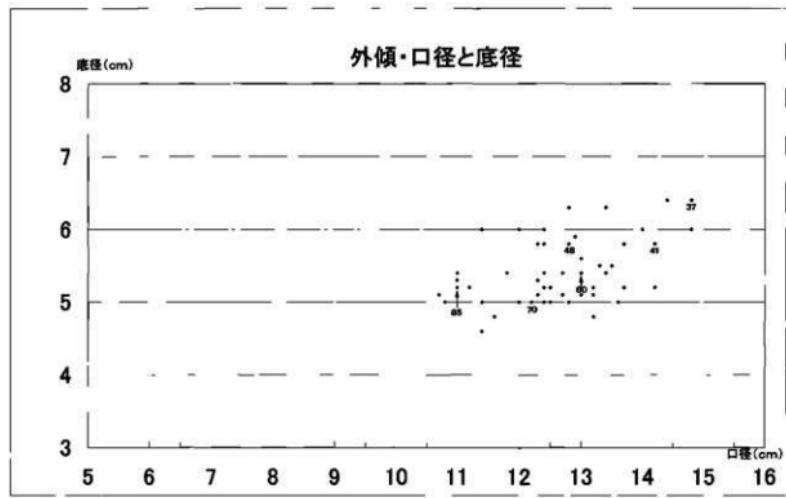
第16図 土器の大きさ分布図（その2）



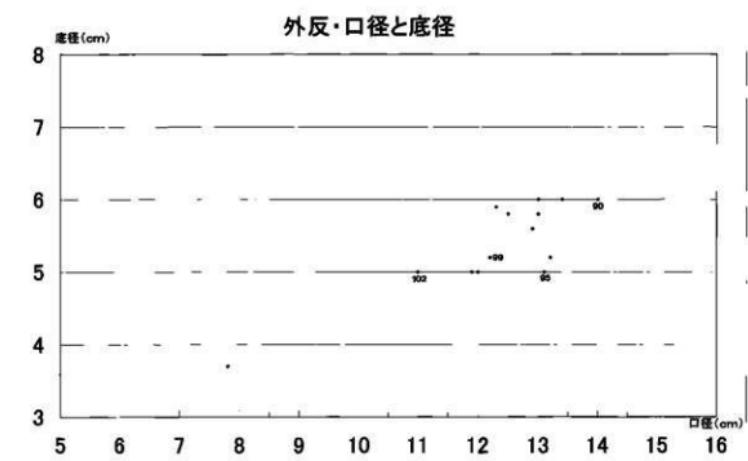
第17図 土器の大きさ分布図（その3）



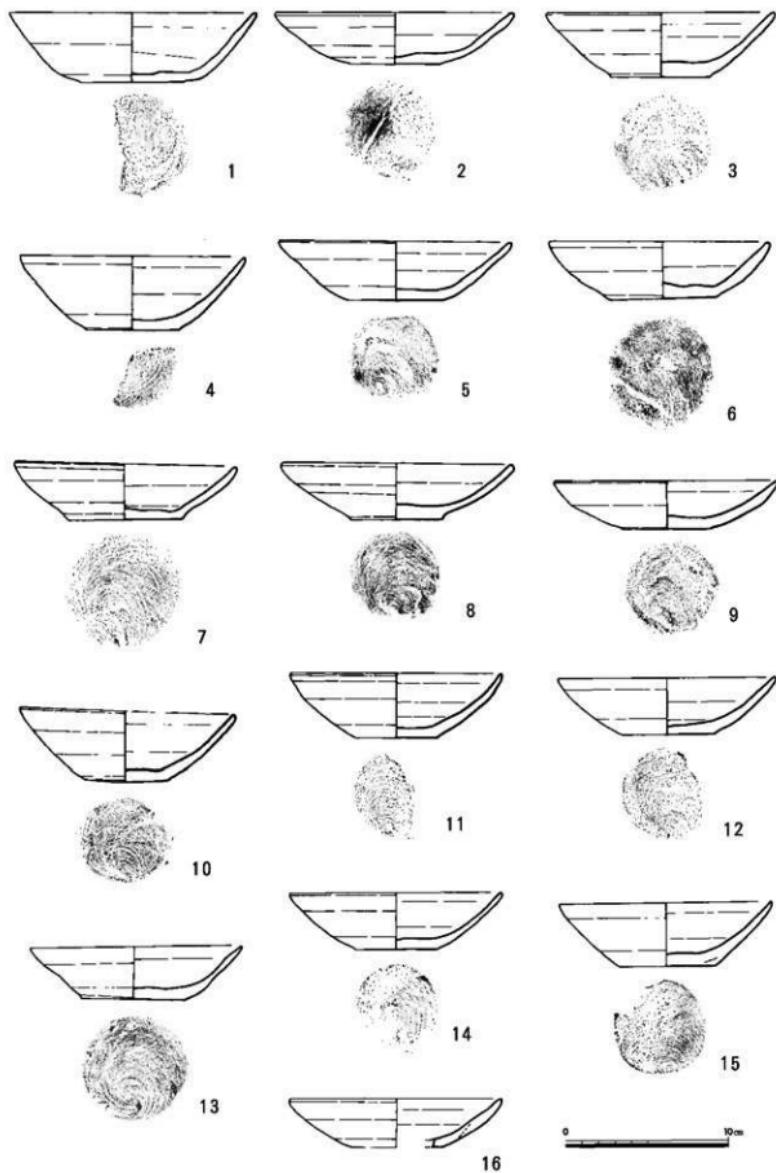
第18図 土器の大きさ分布図（その4）



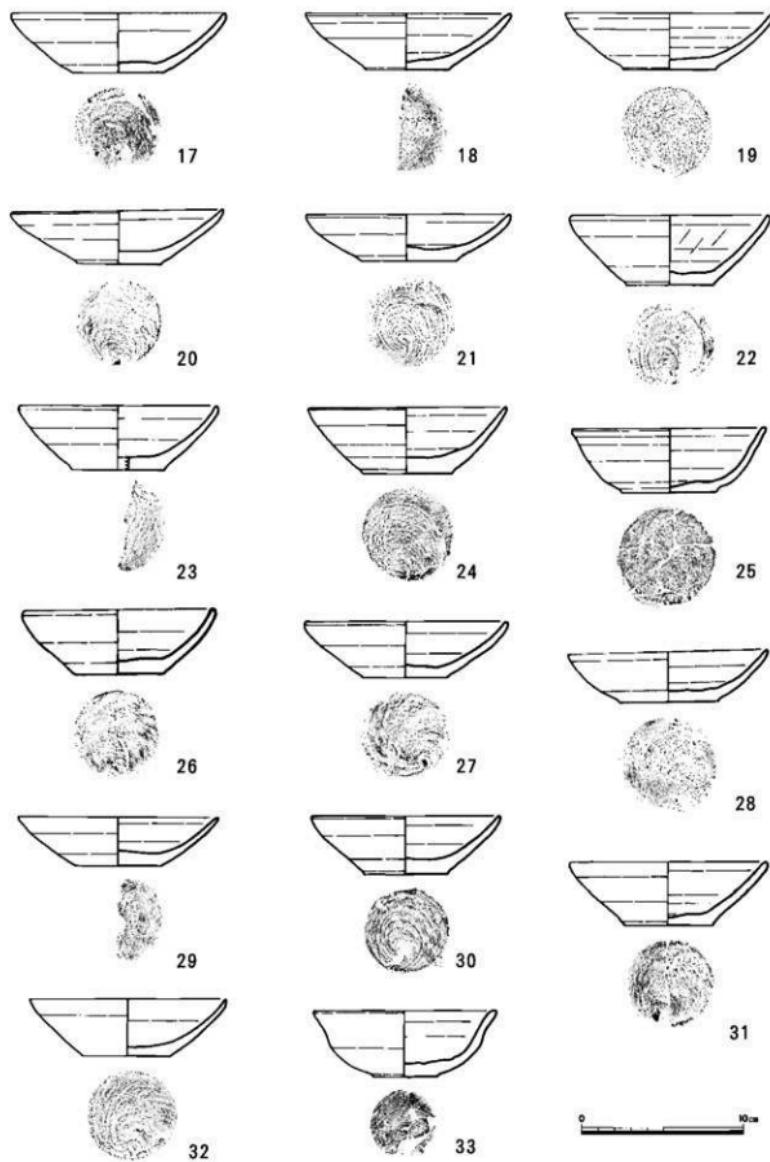
第19図 土器の大きさ分布図（その5）



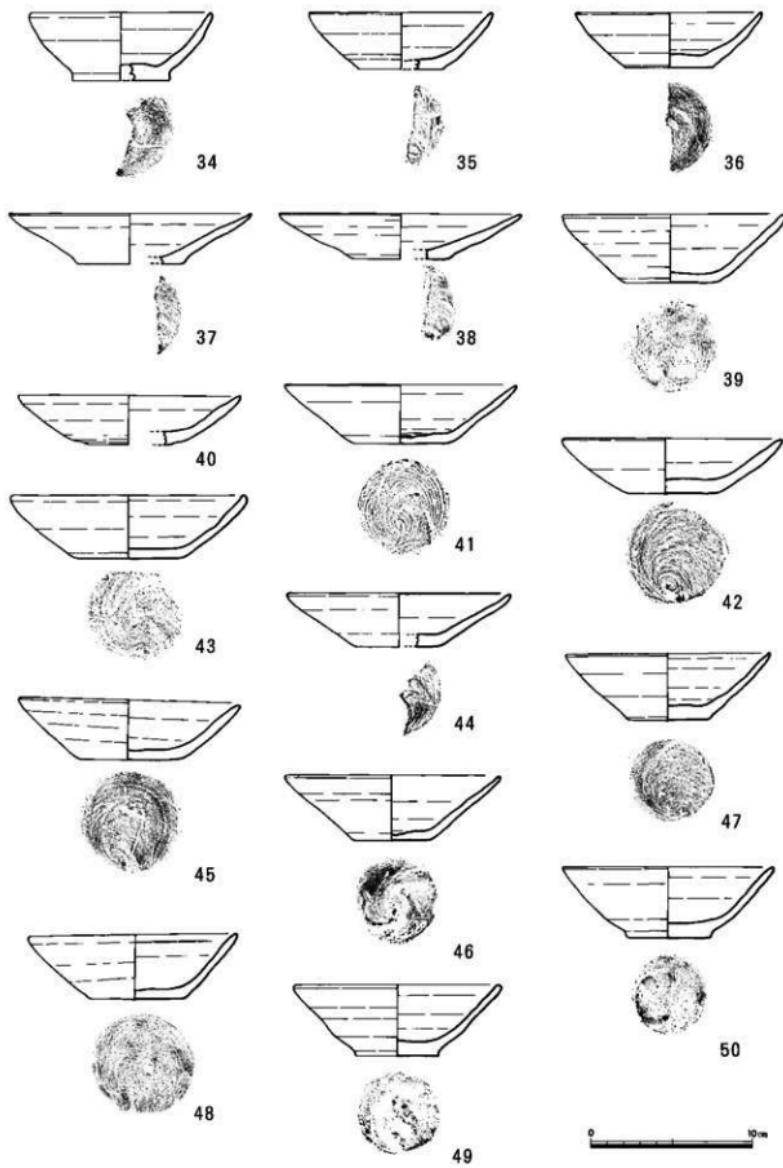
第20図 土器の大きさ分布図（その6）



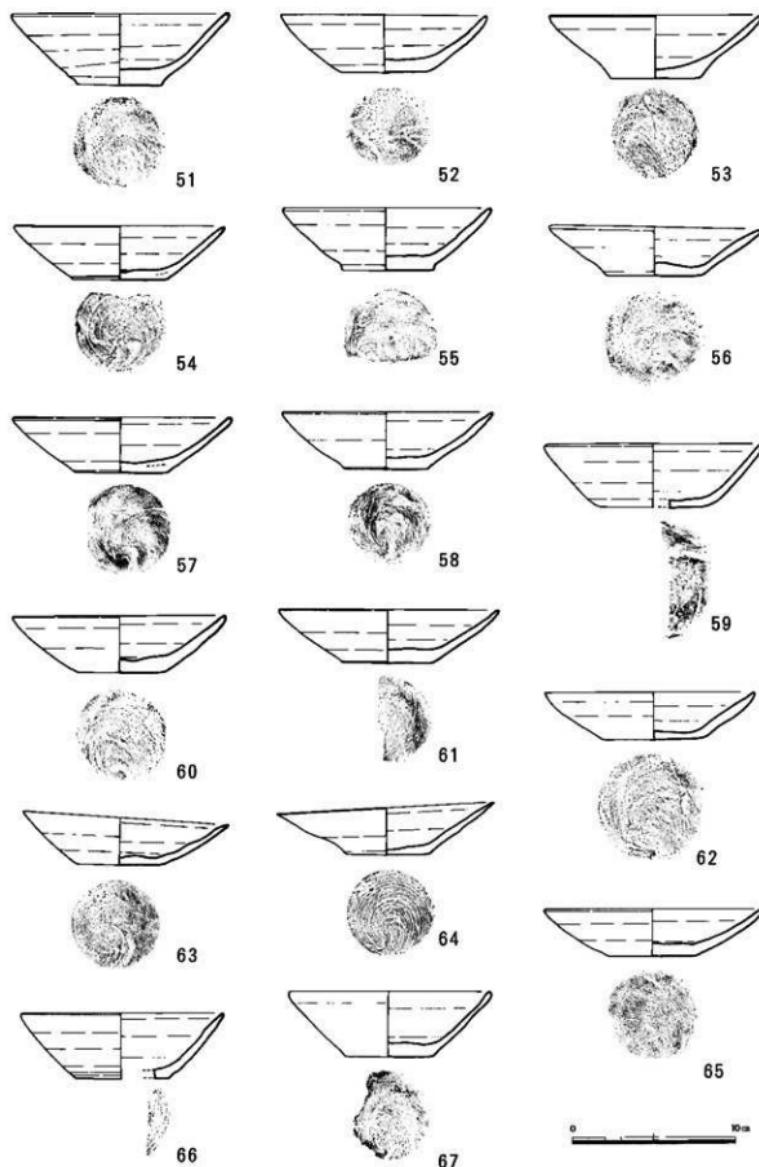
第21図 出土遺物実測図（土師器）



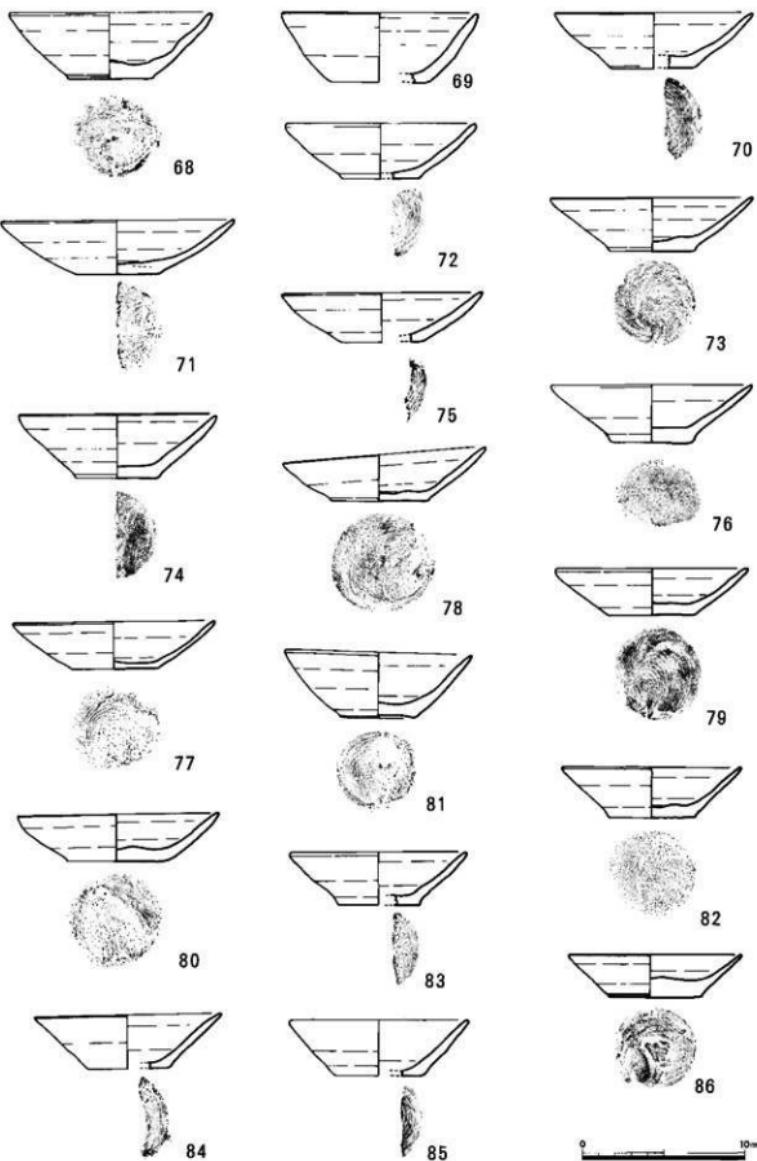
第22図 出土遺物実測図（土師器）



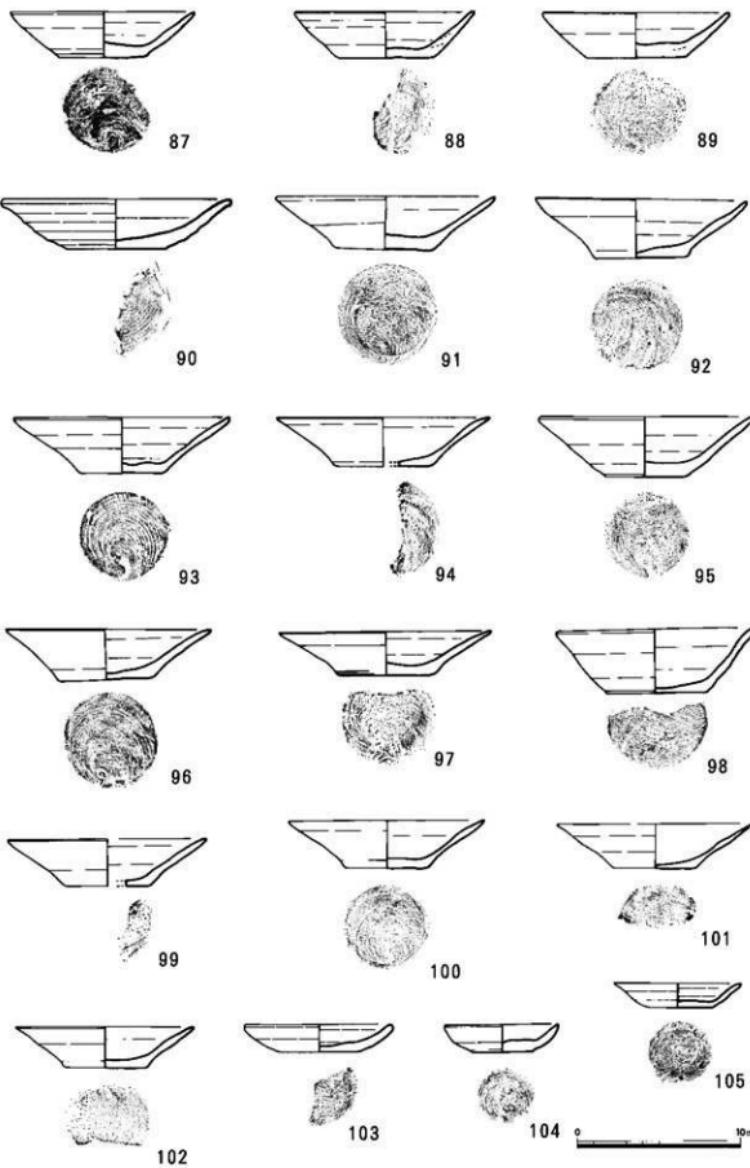
第23図 出土遺物実測図（土師器）



第24図 出土遺物実測図（土師器）



第25図 出土遺物実測図（土師器）



第26図 出土遺物実測図（土師器）

第3表 出土遺物観察表1 (須恵器、陶磁器)

揭露No	図版	調査区	出土位置	種別	器種	高さ	口径	底径	外観		備考
									内面	外面	
1	17-1	2号墳	埴頂	須恵器	壺の蓋	5.7	15.5		円軌ナデ	ヘラケズリ(火井部)	
2	17-2	2号墳	埴頂	須恵器	壺の身	6.1	12.8		円軌ナデ	ヘラケズリ(火井附近)	自然釉(外部)
3	17-3	1号墳	埴頂	須恵器	壺の身	5.3	10.8		圓軌ナデ	ヘラケズリ	
4		N10~15W 11Tr 落ち込み 約20cm上	黑色土 落ち込み (落色で墨)	須恵器	高台付壺	4.7	14.5	8.7	圓軌ナデ	貼り付け高台	
5	18-1	1号墳	埴頂	須恵器	甕				圓軌ナデ	貼り付け高台	
6	18-3	N5-W5~10Tr	黄褐色土	陶器	甕			4.9			江戸中頃 旗輪 削出し高台
7	18-2	N15~20 W11ライン 落ち込みTr 上方(中央)	黑色土 落ち込み 上方(中央)	白磁	甕			7			中国双施釉 12C
8		N15~20 W11Tr	暗茶色 褐色土	土師器	柱状 高台付壺			5	ナデ	泥板余切り痕	11~12C
9	18-4	6G	表上落 下剥、十箇目	土師器	柱状 高台付壺			5.6	ナデ (?)	泥板余切りナデ	風化 12C
10		N15~20 W11ライン 落ち込み 上方(中央)	黑色土 落ち込み 上方(中央)	土師器	高台付壺			7	ナデ	圓軌余切り	企蓋母 11~12C

(単位: cm)

第4表 出土遺物観察表2 (鉄器、鐵滓等)

揭露No	図版	調査区	出土位置	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	19-1	6G	地山直上層	鉄製品	鍔	13.1	17.3	0.6	135	
2	19-2	2G		鉄製品	釘	8.2	0.8	0.7	26	
3	19-3	N10~15=5Tr	地山直上層	鉄製品	釘	6.8	1.5	0.9	70	
4	19-4	N15+W11延長Tr	黒色土層	鉄製品	釘	15.1	1.7	1	170	
5			地山直上層	鉄製品	釘	7.5	0.8	0.5	35	
6		N15~20=5Tr	地山直上層	鉄製品	釘	8	0.7	0.7	18	
7		6G		鉄製品	釘	6.5	0.7	0.8	27	
8		N0~5=5Tr	砂岩、黒色 土層	鉄製品	釘	7.6	0.7	0.6	20	
9		6G	地山直上層	鉄製品	釘	4.9	0.6	0.35	12	
10	19-5	7G		鉄製品	鍔	7.9	5.9	2.4	78	
11	19-6	6G		鉄製品	鍔	4.6	4.5	4.2	108	
12	19-7	W11-N15附近	黒色土層 上層	鉄製品	鐵滓	4.4	3.5	2.3	20	
13	19-8	1G	黒色土層 (下)	鉄製品	鐵滓?	3.3	2.9	2.5	20	
14		7G		土製品	猪大		3.6	3.45		

(単位: cm・g)

第5表 出土遺物観察表3 (古銭)

発掘場	回収	調査区	出土位置	銭名	初鉄年	直径(上・下)/銭厚(左・右)	内径(上・下)/内径(左・右)	銭厚	量目
1	20-1	6G	西側土手 到山表面	東北通宝 (吉)	1636	23.5/23.5	20.0/20.0	-	1.2
2	20-2	7G	地山直上層	貞永通宝 (吉)	1636	23.0/23.5	19.5/19.5	-	1.1
3	20-3	W20+ 70cmTr		貞永通宝 文銘	1668	25.0/25.0	18.5/18.0	-	1.3
4	20-4	W20+ 70cmTr		貞永通宝 高津銘	1741	23.0/22.5	17.0/17.5	-	1.1
5	20-5	2~3G	西側土手 西側面表面	寛永通宝 (背)	1697	25.0/25.0	21.0/20.0	-	1.3
6	20-6	W15~20 5Tr	地山直上層	無文銘		23.0/22.0	-	-	0.9
7	20-7	4G		一銭	明治13年	28.0/28.0	25.0/25.0	-	1.6

(単位:mm・g)

第6表 出土遺物観察表4 (土師器)

発掘場	回収	調査区	出土位置	種別	器種	器高	口径	底径	外面		備考
									内面	内面	
1		1G		黒色土	上部器	环	4.3	15	6.3	回転ナデ 同軸糸切り	化粧焼
2		1G		黒色土	上部器	环	3.2	14.6	5.4	回転ナデ 同軸糸切り	前面化粧焼
3		1G		黒色土	上部器	环	4	14	6	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼
4		17v-NS-W0-4		黒色土	上部器	环	4.5	13.9	5.8	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼 金雲母
5	21-1	17v-NS-W0-5		黒色土	上部器	环	3.6	14.2	5.6	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼 金雲母
6	21-2	1G		黒色土	上部器	环	3.7	13.5	6.3	回転ナデ 同軸糸切りナデ(?)	
7	21-3	1G		黒色土	上部器	环	3.7	13.6	7	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼 金沾母
8		1G			上部器	环	3.5	14	5.6	回転ナデ 同軸糸切り	全面化粧焼
9		1G		黒色土	上部器	环	3	13.8	5.4	回転ナデ 同軸糸切りナデ	
10		1G		黒色土	上部器	环	4.6	13.2	5.2	回転ナデ 同軸糸切り	
11		1G		黒色土	上部器	环	4	13	5	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼 スス付着
12		1G		黒色土	上部器	环	3.5	13.3	5.5	回転ナデ 同軸糸切りナデ	スス付着
13	22-1	1G		黒色土	上部器	环	3.4	13	6.3	回転ナデ 同軸糸切りナデ	
14	22-2	17v-NS-W0-5		黒色土	上部器	环	3.5	13	5	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼 金雲母
15		1G		黒色土	上部器	环	3.9	13	5.8	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼
16		1G		黒色土	上部器	环	3	13	5.6	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼 藥化銀
17		1G		黒色土	上部器	环	3.7	13	5.3	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼
18		1G		黒色土	上部器	环	3.5	12.5	5.1	回転ナデ 同軸糸切り	化粧焼
19		1G		黒色土	上部器	环	3.5	12.8	5.6	回転ナデ 同軸糸切り	
20		1G		黒色土	上部器	环	3.5	12.9	5.1	回転ナデ 同軸糸切りナデ	化粧焼 金雲母
21		1G		黒色土	上部器	环	2.9	12.5	5.7	回転ナデ 同軸糸切り	
22	22-3	1G		黒色土 (下)	上部器	环	4.3	12.2	5.4	回転ナデ 同軸糸切り	化粧焼 金雲母

(単位:cm)

掲載№	図版	洞窟名	出土位置	種別	器種	器高	口径	底深	外側		備考
									内面	内面	
23			土師壺	环	4	12.2	5.6		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	全底母
24	23-1	IG	黒色土 上部器	环	4.1	12	5.4		回転ナデ	回転糸切り	化粧壇
25		N20°~70°cm n/11直交Tr	土師器	环	4	11.9	5.9		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇
26	23-2	IG	黒色土 上部器	环	4	11.7	5.4		回転ナデ	回転糸切り	—
27	23-3	IG	黒色土 土師器	环	3.5	12.4	5.2		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇
28	24-1	IG	黒色土 (下) 土師器	环	3.2	12.2	6		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇 全底母
29		IG	黒色土 土師器	环	3	12.2	5.2		回転ナデ	回転糸切り	化粧壇
30		1Tr=N6-W0~5	黒色土陶	+飾器	环	3.6	11.6	5.2	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇 全底母
31	24-2	IG	黒色土 上部器	环	3.9	12.1	5.4		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇
32		IG	黒色土 土師器	环	3.6	12	5.4		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇 スス付器
33		1Tr=N5+W0~11 地山直上層	土師器	环	4.1	11.2	3.9		回転ナデ	回転糸切り	化粧壇
34		1Tr=N5-W5~11 地山直上層	土師器	环	4.2	11.2	6		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	全底母 スス付器
35		IG	黒色土 十脚器	环	3.5	11.2	5.2		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	—
36		1Tr=N5-WG~5	黒色土 上部器	环	3.4	11.4	5.4		回転ナデ	回転糸切り	化粧壇 全底母
37		IG	黒色土 土師器	环	3.1	14.8	6.4		回転ナデ	回転糸切り(?)	—
38		NO=STr	黒色土 土師器	环	2.8	14.8	6		回転ナデ	指紋感 回転糸切り+ナデ	化粧壇
39	24-3	5Tr-N0~5	黒色土 上部器	环	4.2	13.7	5.8		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇
40		5Tr=N5-E0~4	黒色土 土師器	环	3	13.6	5		回転ナデ	—	化粧壇 風化跡
41	25-1	IG	黒色土 十脚器	环	3.6	14.2	5.8		回転ナデ	回転糸切り	化粧壇 全底母
42		NO=STr	黒色土層 上部器	环	3.4	13.5	5.5		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇 金雲母
43		5Tr=N5-E0~4	黒色土 十脚器	环	3.9	14.4	6.4		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	全底母
44		5Tr-N0~5	砂質1 上部器	环	3.3	13.7	5.2		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇 金雲母
45		5Tr=N0~5	黒色土 土師器	环	3.8	14	6		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇 金雲母
46		IG	黒色土 土師器	环	4	13.2	4.8		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇
47	25-2	IG	黒色土 上部器	环	4.1	12.5	5		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇 (?)
48	25-3	IG	上部器	环	4	12.8	5.8		回転ナデ	回転糸切り	—
49		NO=STr	黒色土 土師器	环	4.4	12.7	5.1		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇
50		IG	黒色土 土師器	环	4.3	13	5.1		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇
51	26-1	5Tr=N0~5	黒色土 上部器	环	4.5	13.2	5.2		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇
52	26-2	IG	黒色土 土師器	环	3.6	12.5	5.2		回転ナデ	回転糸切り	化粧壇
53		IG	黒色土 土師器	环	3.9	13	5.6		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇
54	26-3	IG	黒色土 上部器	环	3.3	12.8	5.8		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇 金雲母
55		1Tr=N5-W0~5	黒色土 十脚器	环	3.8	12.7	5.4		回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壇 全底母

(単位: cm)

測量点	開版	調査区	山土位置	種別	緯度	緯度	日深	底種	外面		備考	
									内面	外輪ナデ		
56	27-1	N0=5Tr	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.1	12.9	5.9	内輪ナデ	外輪系切りイナデ	化粧塗 全蓋母
57	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.4	13.3	5.5	外輪ナデ	外輪系切りーナデ	化粧塗 全蓋母
58	-	N0=5Tr	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.5	12.8	5	外輪ナデ	外輪系切り	化粧塗 全蓋母
59	-	5Tr=N0~5	黒色土質	土解盛	±16cm	环	3.9	13.4	6.3	外輪ナデ	外輪系切りーナデ	化粧塗
60	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.5	13	5.4	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	化粧塗 全蓋母
61	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.3	13.4	5.4	外輪ナデ	外輪系切り	化粧塗 全蓋母
62	27-2	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	2.9	12.8	6.3	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	化粧塗 ヌス付指
63	27-3	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.3	12.5	5.2	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	化粧塗 全蓋母
64	28-1	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.2	13.2	5.1	外輪ナデ	外輪系切り	化粧塗
65	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	2.9	13.4	5.4	外輪ナデ	外輪系切りーナデ	-
66	-	1Tr=N5-W0~5	黒色土	土解盛	±16cm	环	4	12.3	5.8	外輪ナデ	外輪系切り	風化
67	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	4	12.4	5.4	外輪ナデ	外輪系切り	-
68	-	1Tr=N0-W0~5	黒色土層	土解盛	±16cm	环	4.1	12.3	5.1	外輪ナデ	外輪系切りーナデ	化粧塗
69	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	4.3	12	6	外輪ナデ	外輪系切り	化粧塗
70	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.4	12.2	5	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	化粧塗
71	-	N0=5Tr	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.3	14.2	5.2	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	化粧塗 全蓋母
72	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.4	11.6	4.8	外輪ナデ	外輪系切りーナデ	化粧塗
73	28-2	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.3	12.4	5.2	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	化粧塗
74	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.9	12	5	外輪ナデ	外輪系切りーナデ	化粧塗
75	-	1Tr=N5-W0~5	黒色土	土解盛	±16cm	环	3	12.2	5	外輪ナデ	外輪系切り	化粧塗
76	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.5	12.4	5	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	風化気味
77	-	5Tr=N0~5	黒色土層	土解盛	±16cm	环	2.9	12.3	5.3	外輪ナデ	外輪系切り	化粧塗
78	28-3	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.1	12.4	5.8	外輪ナデ	外輪系切り	化粧塗
79	-	1Tr=N0-W0~5 断続地帯上(+) 4号1(上)→3号1 (下)3号1	黒色土層	土解盛	±16cm	环	2.9	11.8	5.4	外輪ナデ	外輪系切り	灯明細 (底面にス)
80	-	1Tr=N0-W0~5	黒色土層	土解盛	±16cm	环	3	12.4	6	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	化粧塗
81	29-1	-	-	土解盛	±16cm	环	4.2	11.4	4.6	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	-
82	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.1	11	5.3	外輪ナデ	外輪系切りーナデ	化粧塗 黒雲母
83	-	5Tr=N0~5	黒色土層	土解盛	±16cm	环	3.2	10.8	5	外輪ナデ	外輪系切り(?)	化粧塗
84	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.3	11.4	5	外輪ナデ	外輪系切り(?)	全蓋母
85	-	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	3.4	11	5.2	外輪ナデ	外輪系切り	-
86	29-2	1G	黒色土	土解盛	±16cm	环	2.6	10.7	5.1	外輪ナデ	外輪系切りイナデ	化粧塗
87	-	N5-W5~11 地山(上層)	-	土解盛	±16cm	环	2.9	11.2	5.2	外輪ナデ	外輪系切りーナデ	化粧塗

(単位: cm)

掲載No.	回収	調査区	山十位溝	種別	器種	測定	口径	底深	外観		備考
									内面	回転ナデ	
88		1G	黑色土	土師器	环	2.9	11	5.4	回転ナデ	回転糸切り	
89		1G	黑色土	土師器	环	2.8	11.4	6	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	
90		N20~70°W W11上方Tr	上部28	土師器	环	3.1	14	6	回転ナデ	回転糸切り	金雲母
91		1G	黑色土	土師器	环	3.4	13.4	6	回転ナデ	直転糸切り+ナデ	
92		1G	黑色土	土師器	环	3.6	12.9	5.6	回転ナデ	回転糸切り	化粧壺 風化
93	29-3	1G	黑色土	土師器	环	3.4	13.2	5.2	回転ナデ	回転糸切り	化粧壺 金雲母
94		1G	黑色土	土師器	环	3	13	6	回転ナデ	回転糸切り	風化
95		1G	黑色土	土師器	环	3.7	13.1	5	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	
96		1G	黑色土	土師器	环	3.4	12.5	5.8	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壺 金雲母
97		1G	黑色土	土師器	环	2.7	13	5.8	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壺 金雲母
98		1G	黑色土	土師器	环	3.9	12.3	5.9	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壺
99		1G	黑色土	土師器	环	2.9	12.2	5.2	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壺 金雲母
100		1G	黑色土	土師器	环	2.9	12	5	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壺 金雲母
101		1G	黑色土	土師器	环	2.7	11.9	5	回転ナデ	回転糸切り	風化
102		1G	黑色土	土師器	环	2.5	11	5	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	
103	29-4	N15~20°W11 直交Tr	落ち込み	土師器	皿	1.7	9	4.8	回転ナデ	回転糸切り	風化
104	29-5	3G	地山内上層	土師器	小皿	1.7	7	3.6	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壺
105		下脚壁12m	内側丘陵	土師器	小皿	1.5	7.8	3.7	回転ナデ	回転糸切り+ナデ	化粧壺 金雲母

(単位: cm)

第6章 総括

遺跡・遺物に関する個別の記載と若干の考察を行なってきた。本章では一度全体を通じて大崎元宮遺跡について総括しておくこととする。

古墳群について： 尾根上に並ぶ3基の円墳はいずれも地山を削り、隆起部にわずかに盛土して墳丘を築造している。築造順序は3号墳→2号墳は確認できた。こうした丘陵上の尾根部分を利用して古墳群を造成する場合は最高部に主墳を造り、次いで下方に築造場所を移すとするのが一般的である。これに従えば本古墳群も最大規模の1号墳を造り、次いで3号墳が築造された蓋然性が高いのではないだろうか。このことが是とされるならば、1号墳と3号墳の間に、最後の古墳として2号墳が築造されるという事実に注目しなければならない。つまり、3号墳の築造場所は当初から予定されていたか、あるいは半墳の1号墳との関連性の強さから敢えて1号墳と3号墳の中間に築造されたかのいずれかと考えられる。

次に主体部についてであるが、これを検出することはできなかった。とすれば、果たしてこれら3基が墳墓かという問題が残る。いうところの後背埴丘の可能性も考えられなくもないが、出土須恵器の時期からみてこれら3基の築造年代は横穴墓の出現期を瀕るのでこの解釈を採用することはできない。ここでは墳丘築造方法等から5世紀後半頃の円墳群としておきたい。

平坦部の遺構と遺物について：尾根の先端部に削平と埋土によって南北に並ぶ2段の平坦部（第1、第2平坦部）と東西に土壠を造成している。これは高所（第1平坦部）が本殿、低所（第2平坦部）が拝殿であったことを思わせる。第2平坦部を中心に検出された柱穴や土壇状の遺構、出土土器等から考えると長期に亘り神社が存続し、その間に数度の遷宮にともなう建て替えの行なわれたことが推定される。確認しえたのは第2平坦部で重複する掘立柱建物2棟以上、礎石建物2棟以上であった。第1平坦部にも礎石建物が存在した可能性は高い。

これら建物の建造時期を直接的に確定することはできないが、第5トレンチ南端の地山上に堆積する黒色土層から大型の土師器环等が一括状態で検出され、その時期が12世紀ごろと推定されること、また、近世陶磁器が採集されることを参考にするならばおよそ中世前半期から近世末にかけて神社が造営・維持されたことは確実である。

第3、第4平坦部は回廊状をなしており、中世期に山城が築造されていたことが推測される。さらに第3平坦部では高台付須恵器环が出土しているが、近辺に横穴墓が存在することを示すか。

今次調査は採土にともなう事前調査で、記述した遺構はすでに失われている。しかし、検出された遺構群が「元宮」の地名から上賀茂神社に因むる建物跡である可能性はきわめて高く、その規模と存続時期について明確な資料をえたことは大きな成果であったといってよいであろう。因みに「元宮」の地から現在の地に遷宮されたのは1873（明治6）年である。

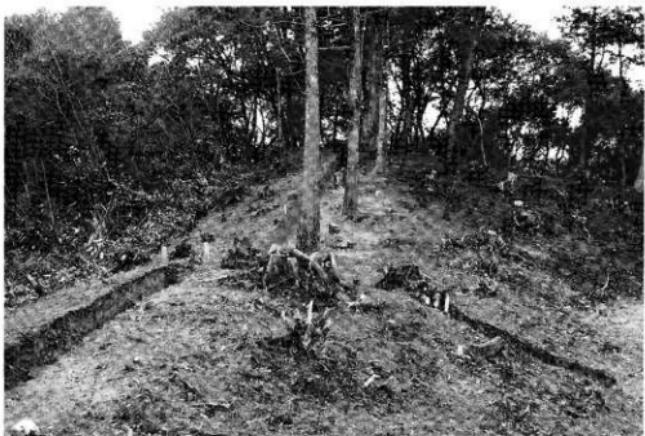
参考までに文字資料等から知られる賀茂神社の変遷表（第7表）と検出された遺構群との対応関係を表示した。

第7表 文献等からみた上賀茂神社の変遷表

1184(寿永3)年	「出雲国福岡庄」／院下文	
1205(元久2)年	京都賀茂神社から勧請／『雲陽誌』	①第2平坦地の削平
	下賀茂社(加茂中に鎮座?)	掘立柱建物の建造
	上賀茂社(中村川河畔に鎮座?)	掘立柱建物の建替え
1539(天文8)年	棟札「賀茂若宮御拝殿」	
1580(天正8)年	棟札	
1590(天正18)年	棟札「賀茂若宮大明神社」	
1623(元和9)年	「賀茂若宮大明神御拝殿」	②盛土による第2平坦地の 拡張
1717(享保2)年	『雲陽誌』大崎村「松尾大明神」 「日吉全体他、下賀茂社と全年なり」	礎石を伴う建物の建造 礎石を伴う建物の建替え
1751(寛延2)年	棟札「上賀茂大明神」	
1787(天明7)年	棟札「上賀茂大明神」	
1809(文化6)年	棟札「上賀茂大明神」	
1832(天保3)年	棟札「上賀茂大明神」	
1856(安政3)年	棟札「上賀茂大明神」	③基壇上の建物の建造 (第1、第2平坦地)
1873(明治3)年	加茂神社境内に移転	



1. 遺跡遠景（南より）



2. 古墳群（1号・奥側、2号・手前）と東西南北トレンチ（南より）

図版 2



1.

1号墳発掘調査前状況（南より）



2.

2号墳発掘調査前状況（南より）



3.

3号墳発掘調査状況（南西より）



1. 古墳群（1号・手前、2号・奥倒）と東西南北トレンチ（北より）



2. 1号墳東側周溝（南より）

図版 4





1. 1号墳全体完掘状況（東より）



2. 1号墳南側墳裾 須恵器出土状況

図版 6



1. 1号、2号墳北側周溝（西より）



2. 2号、3号墳完掘状況（北より）



1. 1・2号墳 須恵器出土状況（北東より）



2. 2号墳 須恵器出土状況

図版 8



1. 2号、3号填完掘状況（北東より）



2. 2号、3号填完掘状況（北より）



1. 第1、第2平坦地調査前状況（南より）



2. 第1平坦地完掘状況（南東より）

図版10



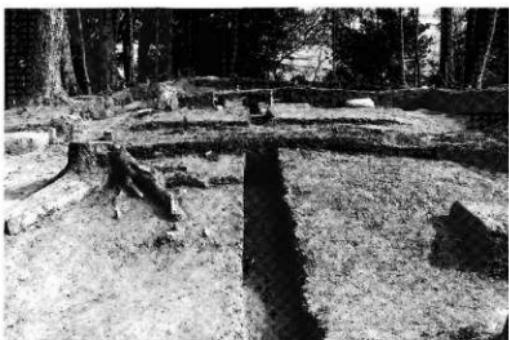
1.

第2平坦地発掘調査前状況
(南より)



2.

第1平坦地、第2平坦地
発掘調査後状況（南より）

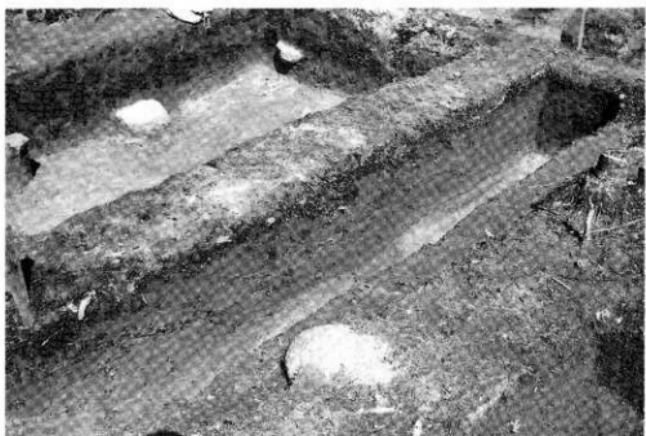


3.

第1平坦地南北トレンチ・
グリット掘り下げ前状況（北より）



1. 第2平坦地礎石検出状況（北西より）



2. 第2平坦地 N15°W0~5トレンチ 砂石・土層断面（南より）

図版12



1. 第2平坦地 主軸トレンチ土層断面・柱穴検出状況（東より）



2. 第2平坦地 N 5・W 0～5 トレンチ土層断面（南より）

図版13



1.
第2平坦地礎石及び柱穴検出状況
(北より)



2.
第2平坦地礎石及び柱穴検出状況
(北西より)



3.
第2平坦地礎石及び柱穴検出状況
(南より)

図版14



1. 第2平坦地主軸トレンチ（1G） 土師器出土状況（南より）



2. 第2平坦地掘立柱建物跡 完掘状況（北より）



1. 第2平坦地掘立柱建物跡 完掘状況（北東より）



2. 第1、第2平坦地 完掘状況（南西より）

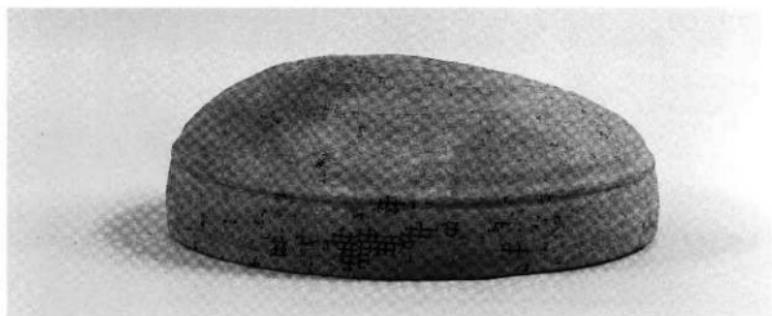
図版16



1. 第2平坦地西側土壠 N15・W5~10トレンチ土層断面図



2. 発掘風景



1. 須恵器（坏蓋）・2号墳 墳頂より出土



2. 須恵器（坏身）・2号墳 墳頂より出土

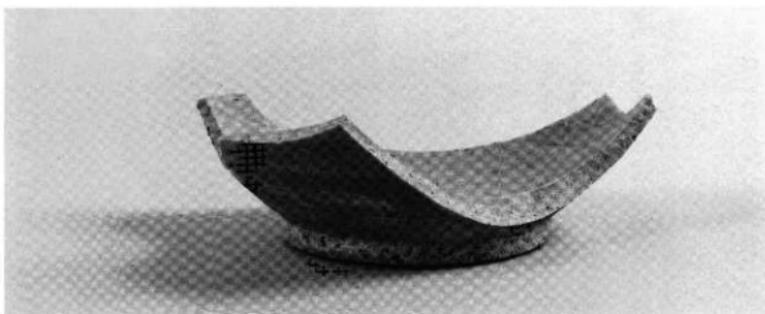


3. 須恵器（坏身）・1号墳 墳裾より出土

図版18



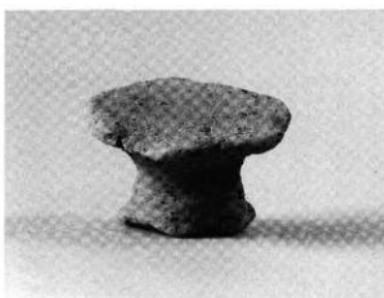
1. 須恵器（高台付杯）・黒色土落ち込みより出土



2. 白磁（碗）・第5トレンチより出土

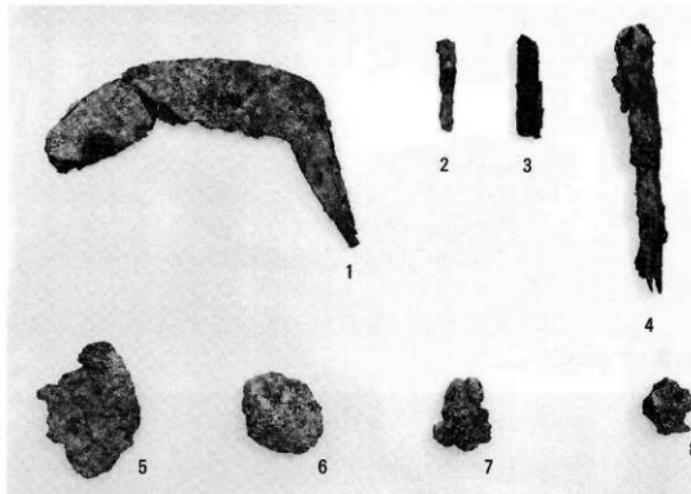


3. 陶器（碗）・第1トレンチより出土



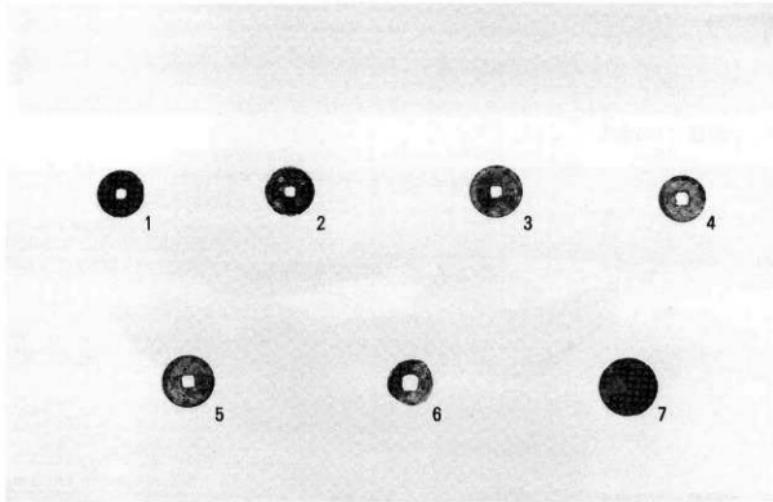
4. 土師器（柱状高台付杯）・6Gより出土

図版19



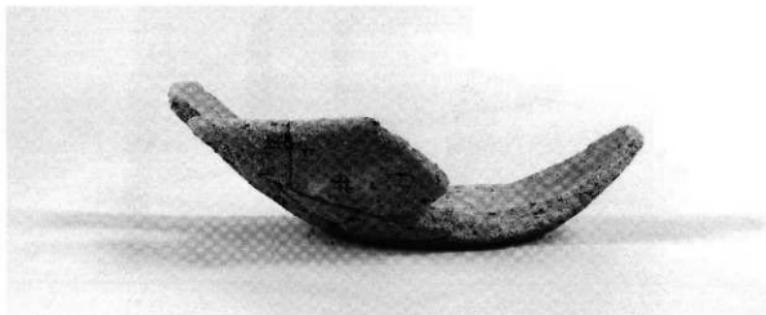
鉄器（1～4）、鉄滓（5、7、8）、鉄塊（6） 1～6 G、2～2 G、3—第5 Tr、4—第3 Tr、5～7 G、
6—6 G、7—第3 Tr、8—1 G 出土

図版20

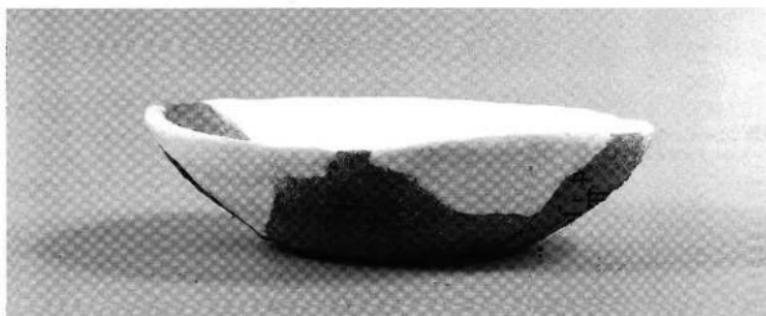


錢 1～6 G、2～7 G、3—W20Tr、4—W20Tr 5—2～3 G、6—第5 Tr、7—4 G 出土

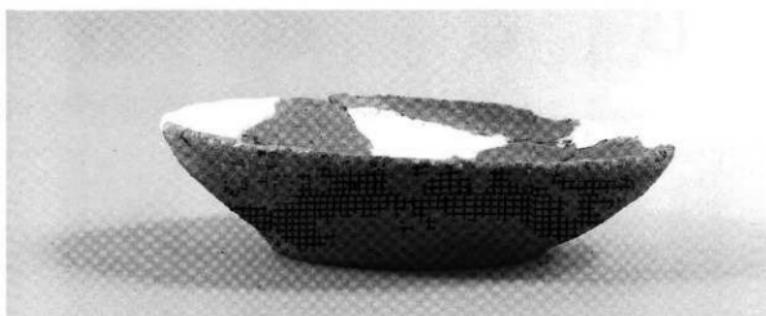
図版21



1. 土師器・第1Tr出土

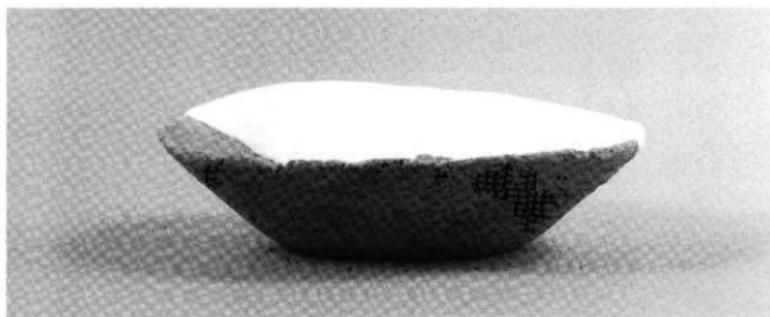


2. 土師器・1G出土

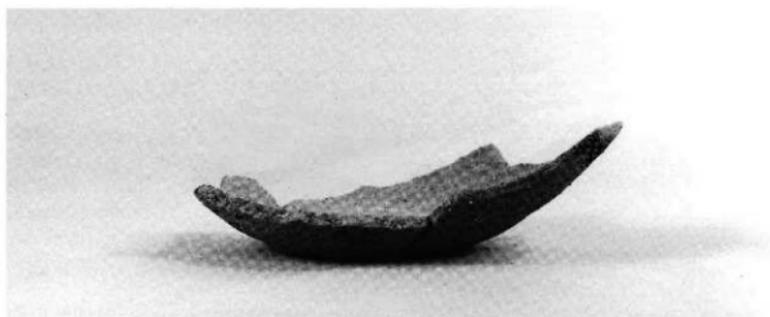


3. 土師器・1G出土

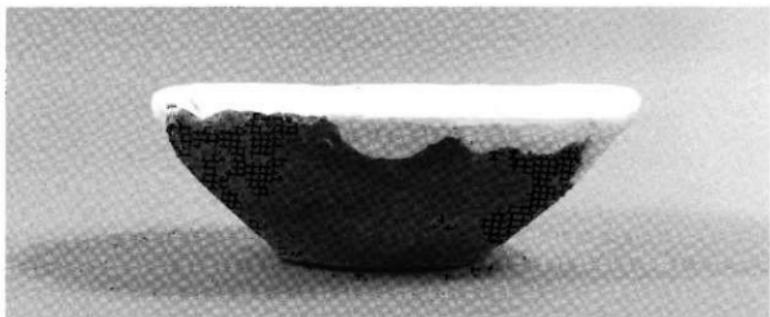
第1Tr、1G出土遺物



1. 土師器・1G出土



2. 土師器・第1Tr出土



3. 土師器・1G出土

第1Tr、1G出土遺物

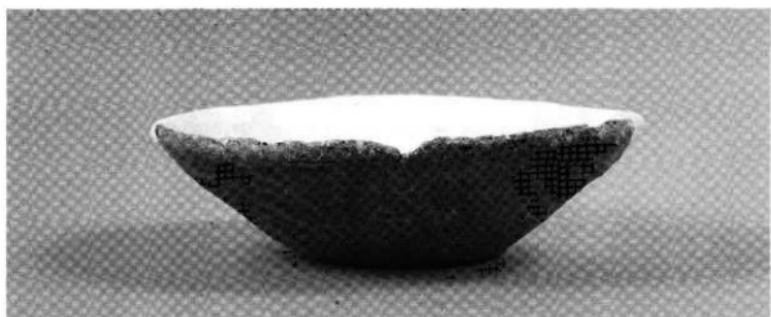
図版23



1. 土師器・1G出土

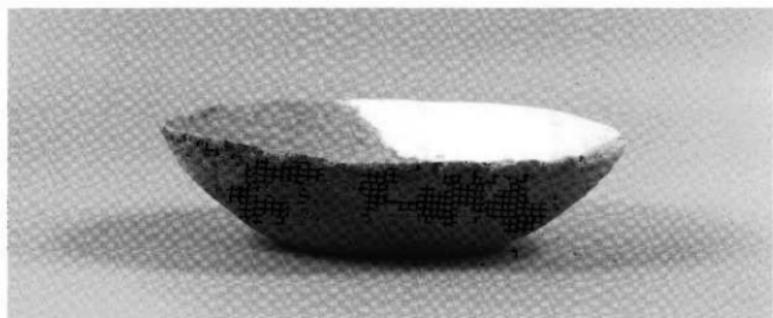


2. 土師器・1G出土

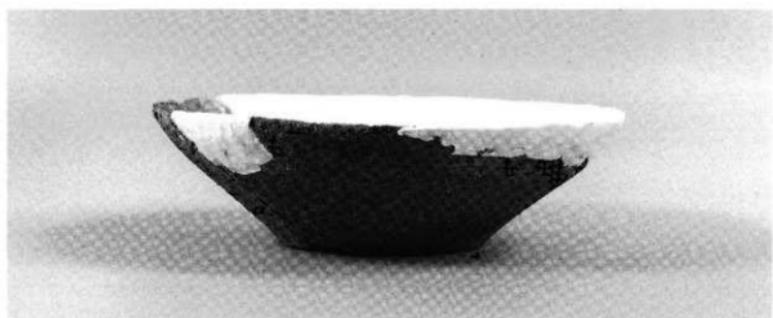


3. 土師器・1G出土

第5Tr = 1G出土遺物



1. 土師器・1G出土



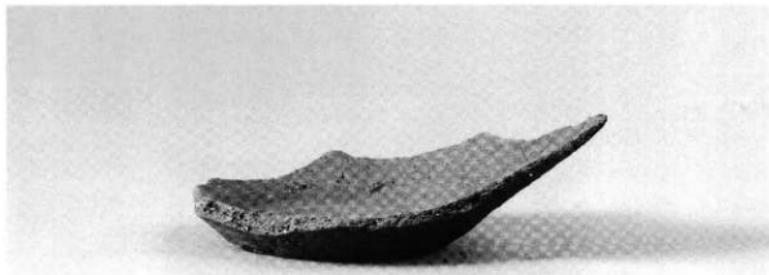
2. 土師器・1G出土



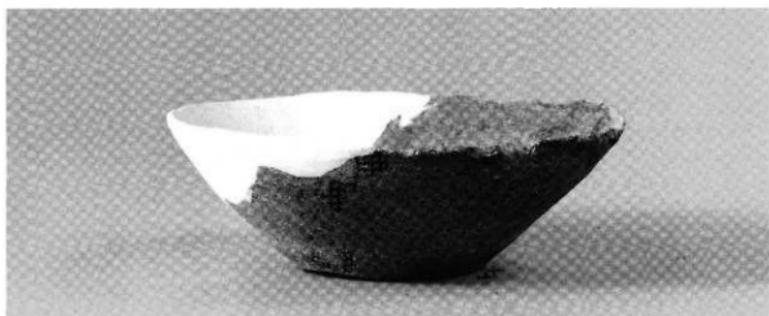
3. 土師器・第5Tr出土

第5Tr = 1G出土遺物

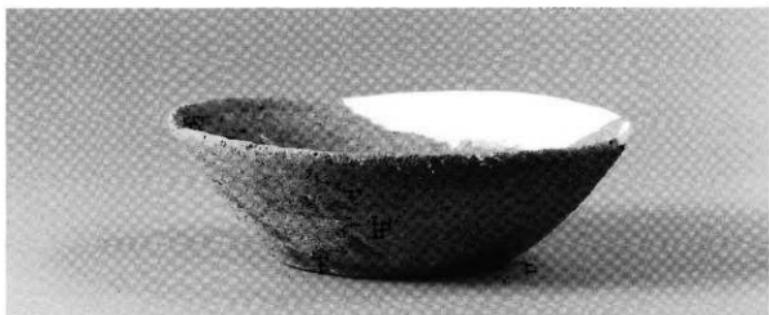
図版25



1. 土師器・1G出土



2. 土師器・1G出土



3. 土師器・第5Tr出土

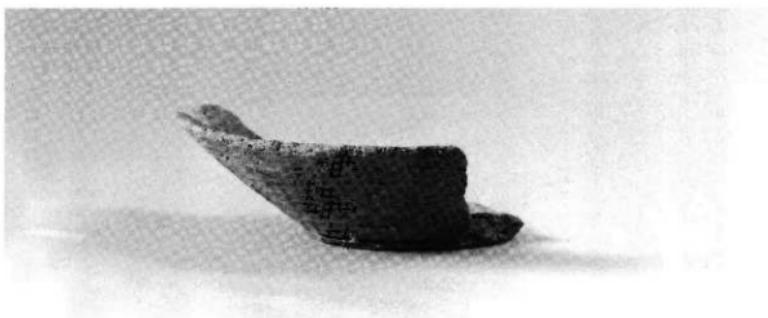
第5Tr = 1G出土遺物



1. 土師器・第5Tr出土



2. 土師器・1G出土



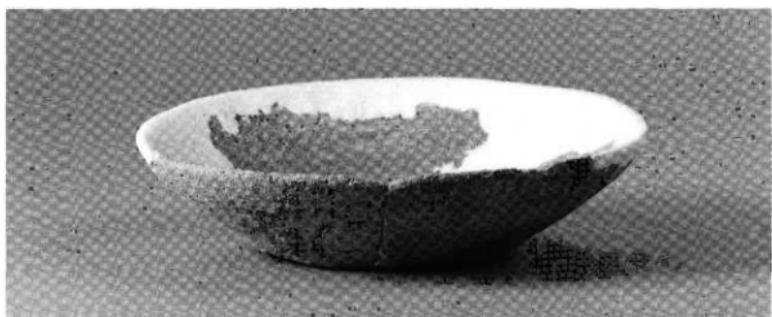
3. 土師器・1G出土

第5Tr = 1G出土遺物

图版27



1. 土器・第5Tr出土



2. 土器・1G出土



3. 土器・1G出土

第5Tr = 1G出土遺物



1. 土師器・1G出土



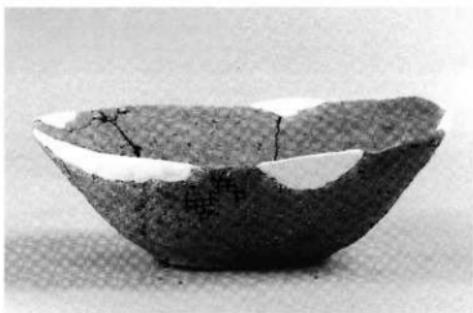
2. 土師器・1G出土



3. 土師器・1G出土

第5Tr = 1G出土遺物

图版29



1. 土師器・1 G



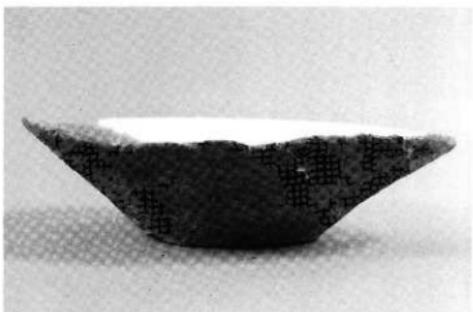
4. 土師器・直交 T r



2. 土師器・1 G



5. 土師器・3 G



3. 土師器・1 G

第5 T r = 1 G、直交 T r = 3 G出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおさきもとみやいせき					
書名	大崎元宮遺跡					
著者名	吾郷和宏 山崎修 上原香里					
編集機関	加茂町教育委員会					
所在地	〒690-1105 島根県大原郡加茂町大字字治303 TEL 0854-49-8510					
発行年月日	西暦2004年3月29日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 調査原因
おおさきもとみやいせき 大崎元宮遺跡	島根県 大原郡 加茂町 大字大崎	32362	P-117	35° 21'06" ~ 135° 53'58" 1998・12・14 1999・5・31	850m ²	防災土取 り工事に 伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
大崎元宮遺跡	古墳 神社跡	古墳時代 中・近世	古墳 3基 掘立柱・礎石建物跡 (古代・中世・近世) 4棟以上	須恵器(古墳時代・古代) 中世土師器 中・近世陶磁器	掘立柱建物跡は遷宮前 の加茂神社跡と推定さ れる	

大崎元宮遺跡発掘調査報告書

発行 平成16年3月

編集 烏賀県加茂町教育委員会
島根県大原郡加茂町大字字治 303

印刷 傳 報 光 社
島根県平田市平山町 993